

古代銅製錬研究を回顧する―長登銅山と池田善文氏の足跡―

渡辺 滋・佐藤 信・館野和己・蔵本隆博

はじめに

本稿の目的は、池田善文（一九四八年）氏による古代銅製錬に関する研究について、美祢市文化財保護課長・長登銅山文化交流館長などとして携わった長登銅山の発掘をめぐる動向を中心として回顧するところにある。

氏からの聞き取りは、三日間に渡って行われた。具体的には蔵本隆博（秋芳町地方文化研究会会長）・渡辺滋（山口県立大学 准教授）が、二〇二五年九月九日（山口県立大学 日本史研究室）に、長登銅山の発掘以前の時期に関する聞き取りを実施した。長登銅山の発掘以降の時期に関する聞き取りは、佐藤信（東京大学名誉教授）・渡辺滋が一月一日（Y I C 山口 応接室）・翌二六日（新山口駅観光交流センター 交流活動ホール）に実施した。なお後半の聞き取りの内容については、当時、文化庁記念物課 文化財調査官として長登銅山の発掘に深く関わった松村恵司（元奈良文化財研究所長）氏に目を通していただき、事実関係の確認などをお願いした。

このほか、発掘・調査の当時、奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部 史料調査室長として出土史料の分析に携わった館野和己（奈良女子大学名誉教授）氏に思い出を寄稿いただいた（末尾に掲載）。

（渡辺 滋）

① 長登以前（二〇二五年九月九日聞き取り）

渡辺…今日は、長登銅山の発掘が本格化する以前の時期に関するお話をお聞かせください。そもそも、池田さんと地域とのご関係はどうなっているのですか。

○ 池田家先祖のこと

池田…池田家の先祖は、親から聞いたのは聞波の中村家。子供がいなくて養子もらったのですが、すぐ実子ができたようです。それで何年かして、あとから生まれた実子を両親が引き取って、すぐ隣に部屋を建てたのが池田家で、実子の方が池田家になったようです。だから実際の中村家の血筋は、うちの方に回っています。隣の中村家はお養子さんが後を継がれて、それが続いているわけですね。だから、うちの方が本筋だというのはよく父親が言っていました。

渡辺…「池田」というのは、元の家の苗字なんですか？

池田…江戸時代は、まだ苗字はないと思います。池田家は明治になってからのことじゃないかと思っています。

渡辺…その養子の方は、どこからいらしたんですか？

池田…どこから来たかは、わかりません。この辺の地域なんだろうと思います。中村っていうのはね、隣の綾木村では大所帯なんです。その親族関係かもわかりません。他に中村なんてあまりないからね。

渡辺…そういう経緯で、池田家が出来たんですね。池田さんで六代目ということですが、そこまでの経緯はどうなっていますか。

池田…代々の当主の名前には、善左衛門（初代）・善右衛門（二代目）など、「善」の字が付いています。幕末の『防長風土注進案』（天保一四年（一八四三）頃の製作）に、間波集落の溜池として、善左衛門堤・善左衛門井手とかいう記事が載っ

ています。我が家の周りの小さな溜池等の名前が善左衛門になったんですよ。代々、家々でその名字をずっと引き継いでいますから判別できます。維新の頃、元治元年（一八六四）二月一二日、藩主毛利敬親が大田本陣を視察して、秋吉台などでの銃剣稽古や美祢宰判内一〇ヶ村の孝悌力田高壽の者約百名に銀・銭を賜うた記録がありますが、この中に大田村の善左衛門の名が見えます。

渡辺：屋号みたいなのは、ないのですか？

池田：聞波地域では、屋号は少ないですね。それぞれの苗字がバラバラだったから、区別する必要がない。

渡辺：代々の当主は、どういう方だったのでしょうか。

池田：善蔵（三代目）は大正頃に、周りの山が低いんで茶畑をあちこちに奨励して、その組合長を務めるなど、結構活躍しています。『美東町史』にも載っています。

【写真1】

渡辺：周辺で、今でもお茶を作ってる所はあるんですか？

池田：ありませんけど、集落内の山々にはまだ生えている所があります。だからここ茶畑だったというのがわかりますね。

蔵本：むかし芝草山が、大体比高三〇mぐらいは里山から水田肥料用の草を刈ってましたから、その平地はお茶を植えたり、桑を植えたりという、そういう副業があったのでしょうか。

池田：善蔵には男の子がいなくて、結局四代目は小野村（現宇部市）から鶴松という養子をもたらしています。で、鶴松の実家は原田と言うんですけど、兄弟が多くて。小さい頃からお寺の小坊主として修行に出されておったようで、西本願寺の得度を受けて、坊主の資格を持っていたようです。だから池田家に来て、僕が小さい頃、よく思い出すのは、もう三日に一回位はお寺参りに行って



写真1 曾祖父の善蔵（昭和初期か）

ましたね。いつも米一升を持って出るから、親父と喧嘩してましたわ。「また持つて出る」ってね。美祢市内外の各お寺へお参りしていましたが、その住職の先輩なんですね。そういう側面を持ってまして。だから晩年はほとんどお寺通いで、作詞を宗教的にして、曲目は美空ひばりで、これがもう流行ってますね。その地域で池田のじいちゃんが来たら歌を歌えるつちゅう、まあお寺に行く一つの寄り所となっておったような感があります。今お寺がいろんなジャズとか改革をやる場所がありますが。だいたい念仏というのは人間に安らぎを与えるようなものが念仏でしょうからね。それを歌謡曲で唄っていた。まあ斬新的ですわ。一九六五年頃から、そういうことをやってたようです。

渡辺：鶴松さんという方は婿養子で、奥さんのほうは先代善蔵さんの娘ということですね。

池田：そう。このおばあちゃんはね、親父が一八歳頃早く亡くなったようです。だからずっと子供たち四人をおじいちゃんが育てたんです。父（善一）は四人兄弟の二番目で男一人です。あと三人女性です。父は近衛兵になるんですが、近衛兵というのはまあまあ家の家柄もないといけんし、体力・容姿も条件だったようです。大田町で三〜四人位ですかね（山末旅館の長男や同じ地区の杉村さんなど）。当時としては器量が良かったんで

しょう。一九四五年四月の東京大空襲で、九段坂の辺を警備しておったようですが、すぐ隣の戦友が戦死したらしい。「まかり間違えば、お前はおらんわしもおらん」ってよく言っていました。

【写真2】

近衛で馬を扱っていたのでしょうが、馬が好きでした。戦後はうちは馬を飼っていました。よそは皆、牛でゆっくり農業をさせるんですが、うちは馬で



写真2 父の善一、18歳頃か（1943年頃か）

すから早いですよ。田んぼを走りながら僕も小学校三・四年ぐらい、よくあの馬鋤に乗せられていました。落とされないように必死でした。で、そのうち牛も飼いました。牛は、そのうち乳牛も飼いました。乳牛は三・四頭ぐらいいましたね。乳搾りも時々やらされました。これが大変です。朝やるもんで。小学校の高学年ぐらいになると、親戚が三菱農機の会社を建てましたから、親父もその会社に勤め始めまして、集落で一番早くトラック買った。耕運機とかいろんな農業機械が一九六一〜二年ぐらいから入ってきました。田んぼは一八〇〇〇平米ありましたから、集落じゃ一・二の面積です。今は減反政策ですと縮んじやって、圃場整備したから二割ぐらい無くなりました。

渡辺…池田家は米作りを行っていたのですか。
池田…その頃は農協の斡旋で、スイカや白菜を近所の農家と共同で栽培していましたね、「美東白菜」は北九州の市場などへ親父が運んでいました。夏休みは泥棒が来るので、近所のおじさん達と畑に「かや」を吊って寝ずの番です。将棋などで鍛えられましたね。一九七五年ぐらいからイチゴ栽培をやる。ピニールハウスでやりました。これがね、夏が大変なんです。夏の暑い日にイチゴの苗を植えて来年用の新しい苗を仕立てるんですね。その作業をね、よく夏休みにさせられましたね。暑いのにもう大変だったのを覚えています。

渡辺…イチゴなんかは、うまくいったらお米より収入が見込めそうですね。
池田…結構稼いでましたよ。当時（一九七五〜九〇年頃）、四〇〇万円位は農業収入がありましたかね、米は二〇〇万ぐらいで、それ以外にイチゴ・メロンでも結構収入がありましたね。うちの子供（じいちゃんの孫たち）が生まれたら、イチゴ・メロン食べ放題で喜んでましたよ。もうそれが一九九二〜九三年ぐらいまで続きました（所得税の青色申告をしていましたから、良く覚えていません）。

渡辺…池田さんが役所に就職した後も、生活の中で農作業のウエイトは高かったんでしょうか？

池田…それは、主に両親がやりました。僕の仕事は社会教育が長かったですからね。日曜日は公民館結婚式とか行事ばかり出させられて、休みがなかったんです。一九八〇〜八一年ぐらいから半ドンになったんですかね。それでも土曜日も行事が増えてね。だからね。土・日曜日はもうほとんど仕事でした。

○ 小学時代

渡辺…話を戻して、ご自身の小学校時代からお願います。

【写真3】

池田…小学校時代は、松井家（母方の実家）で夏休みをよく過ごしました。今の秋吉と嘉万の中間の瀬戸峡



写真3 生後一ヶ月の善文

谷を川すれすれに断崖を削った道を防長バスが走るんです。だから窓から見たら、もう道が見えなくて川なんです。怖いから、いつも反対側に乗ってました。バス停で、小学校三年ぐらいの頃から、妹（京子）と二人乗せられて。母親が「じゃあ車掌さんよろしくお願いします」ということで、車掌さんが下車を気遣ってくれる。そういう状況で行って、一〇日間ぐらい向こうで泊まっていた。母の実家松井家は、桃・梨・ブドウが食べ放題でしたからね（現在の秋芳梨の産地）。

蔵本…この道は、ちょうど秋吉台が迫ってるんですよ。今は、その場所を火薬で爆破して道路を広くして通ってますけど、昔はこう迫ってましたね。

池田…小学校時代は、子供が乗るような小さな自転車は無いから、バス通学でした。バスで行くのはいいけど、一度秋芳町の方に入ってから行くんです。バス停が秋芳町なんで、秋芳町の秋吉小学校の連中が通るんですよ。その連中と喧嘩してまして。山に登って合戦したりね。だから僕ら一人じゃ帰れない。二、三人一緒でないと。で、バスの待ち時間があるので、いつも学校に居残っていたんですけど、当時石田隆典先生という怖い先生（字名がゴジラ）がいて、温室を作ってサボテンやランを栽培していたのに担ぎ出されて、嶺村君いつも水やりをしていました。たまにはタバコを買ってこいとか郵便局にも使い走りをしていました。私は小学校高学年はずーっと学級委員をしていたので、なかなか断れ無かったですね。

【写真4】

渡辺…このころの村の様子はどうでしたか。

池田…当時、集落は三軒位ありまして(現在は一八軒)、小学校四年生頃(一九五八年頃か)に初めてテレビが来ました。

集落では三軒位がテレビを買って、我が家もその内の一軒で、夕方になると近所のおばさんや子供達がプロレスを見に来るんですね。隣のおばさんなんかは夢中になって、身を乗り出して力道山が勝つのを喜んでいたのを記憶しています。そんな関係で、同級生が一〇人位居ましてよく我が家に遊びに来ていました。小学校六年位だったと思いますが、二つ下の男の子が親父の猟銃を引っ張り出して、引き金を引いたものだから、散弾が発射して危うく人に当たるところでした。親父から大いに怒られた事があります。

その頃、私はBCGを毎年打っていましたので、水泳に行けない。我が家の後ろの道からため池に行く道があり、夏休みは毎日子供達が泳ぎに行くんですが、私は寂しく我が家に居残り。そんな子供達が野良犬の子犬を我が家の農作業小屋に置いていき、それを我が家で飼うことに親父も納得してくれて、「コロ」と名付けましたが、妹と共にそれは可愛がりましたね、柴犬の雑種で雌犬でしたが、毎日が楽しい日々を送りました。コロのお陰で我が家の鶏小屋に来るキツネを退治したこともあります。私が郷里に就職してから二三年後に亡くなりましたから一五年は生きたと思います。その後、飼い犬はクサリで繋ぐ事が義務づけられて家で飼うことは諦めましたかね。



写真4 善文六歳、下嘉万松井家にて、父母・妹：京子、従兄弟(茂生・成子・俊子)

○ 中学時代

渡辺…つづいて、中学はどうでしたか。

池田…中学校は、当時、四町村が合併したんです。その時に中学校も一つにまとめたことになった。その代わり、中学への通学バスを用意してくれる。バス満員ですよ。私たちは昔ながらの大田の地域ですからバス代の補助はないんですね、不合理だと思っていましたよ。一学年三〇〇人位(五人×六クラス)ですから。教室でも、席が後ろの方の生徒は壁にピタッと着くんですよ。席替えて後ろになった時は、先生の目を隠れて、屋上に上がって友人が持ってきたエロ本見ました。これが半年ぐらい続いたね。その時の英語の先生が、晩年にある小学校の校長なって。僕は社会教育課の課長しましたから、よく飲み会があって「池田君の時に僕は初めて英語を教えて、あれが最初で最後やつたんや」って、職業・凶工の先生が、どうりで英語がその…。嫌だったんですよ、英語の授業。最初ね、「It's a Pen」の発音がおかしいって、なんだこの先生」と思ってね。結局英語は生涯ダメになりましたね。まあそういうことで、だんだん成績も下がっていきました。

三年の時に、初めて天然色の映画「ナパロンの要塞」を見に行こうやちゅって、金重進君と二人で自転車に乗って行った。宗国というところから小郡に出る近道の仏坂峠のトンネルを通って行ったんですが、トンネルの向こうへ出たと思ったら、田んぼがバツと広がって、あぜ道ぐらいいしか残ってないんですよ。明治の二〇年代には使われなくなった道ですからね。でもそれ以前はそれが本道で瀬戸内海と日本海を結ぶ道でした。仕方なく田んぼの畦を自転車を担いで大方五、六〇mも歩いたのを覚えています。この経験はね、後々、長登銅山の銅輸送ルートを考えるとき、大いに役に立ちました。

○ 高校時代の郷土研究部活動

池田…考古学に興味を持つ切っ掛けになったのは、この角に古い校舎がありましてね(※写真)。そこに人骨や土器が並べてある。この部屋ですね(※写真)。蔵本…この校舎はなかった。この時にはなかった。全部壊して作ったんだからね。だからこれ卒業してから後ろが先にできた。池田…卒業してからかいな、これができたのは。

蔵本・うん。卒業する前はこっちの半分。僕ら三年生の時、こっから半分しかできない。

池田：私は最初陸上部に入っていたんですけど、五〇m走のタイムが六秒一であったのを覚えています。結構早かったんですけど。ところが、まだ木造校舎があつて、その一番端っこに、ちょっと教室の半分ぐらいの部屋があつたんですよ。そこに箱式石棺から出た頭蓋骨や、土器がたくさん置いてありました。運動場に降りる途中、それらを毎日見ながらもう不思議で、それで興味が湧いて郷土研究部に鞍替えしました。いろいろな活動をしました。たとえば秋吉台には、洞窟がたくさんありますね。洞窟にカーバイトランプを持って入ったり、土器が拾える畑で土器探しに明け暮れ、あと観光でどんどん人が来るようになって、その観光調査という名目で秋吉台でアンケート調査を実施したり。そういう郷土的ないろんな活動をやってました。

蔵本：観光調査もね。新聞記事があるよ。高校生が観光調査して、こういう傾向であつたっていう新聞記事が出たから、いまでも持つてる。

洞窟探検は、松井くんが本気でやってくれました。で付いて入って。カーバイトランプっていうのは、アセチレンガスで火をつける。だからポツと消えた時、マッチが濡れとつたら大変ですよ。明かりなしだと、命がけです。足元も悪いから一人では入らない。グループでね。

遺跡は、町内はほとんど回りました。それを全部地図の上に落としていって、一覧表を作った。その前に森先生っていう方が、全部調査して遺物を集めておられた。それを僕ら見よつたんですけど、



写真5 美祿高校郷土研究部(1965年)

それからさらに僕ら二人で発見して歩くんです。それが楽しくて、土・日ほとんど家にいなかった。

池田：面白い先生でね、もう「日本史」のテストが二問。「土師器について書け」とか。

蔵本：ノートが残ってるんですよ。森先生のノートが。この前から見ますけど、本当にきめ細かくノート取ってるんですよ。地元の伝承とかね。だから自分が発見した時の図を書いてる。詳しい説明をして、自分で勉強もしていらっしやるんですよ。同和問題まであつた。

【写真5】

池田：郷土研究部では、彼(蔵本氏)が部長で私が副部長でした。ただ彼は、生徒会の会長もやりましたから忙しかった。

蔵本：でも、部には一年生と三年生しかいないんです。僕ら一年生がどつと入った時には、三年生がよろつとしかいない。二年生がいなかったんです。部を出している本があるんです。一年に一回ぐらい出すやつ。それが一号・二号で止まっていたんですが、僕らの代になって三号を出したんです。生徒会の予算が付いたから。池田君がその時、「大田・絵堂戦」について書いた。僕たちはあの頃自分らが歩いた遺跡を全部紹介したり、いっぱい書いた。

池田：ちょうど大田・絵堂戦の百周年だったんですよ。内容的には、あちこちの本を摘まみ食いついてまとめただけなんだ。ただ初めて地図を作ったんですよ。戦略図の軍隊がどういふふうに動いたか、見たらわかるように。後々の美東町のパンフレットでは、それがみんな参考にされていました…

蔵本：池田君は、地理が好きでね。先生が山本正大先生。まともに授業したことないんです。たとえば、世界中のトイレの話を始めますよ。南方に行ったら栈橋があつて、そこから落とすとかね。ただ、あの当時、僕は池田君は歴史学に行くだろうと思つてました。まあ地理じゃなくて歴史学。こういうの見てね。ただ受験勉強、本当にしてないです。池田君と二人で。歴史の話、考古学の話なんかやるでしょう。そうしたときに、その他の連中はまあ一応その田舎の学校だけど、ガリガリやってるわけですよ。我々は、あんまりやっちゃったですね。それで突然、池田君は東京の大学を受けるっていうのがすごい。

池田「いやいや、それはね、親父が絶対大学行くのはだめっていうから。結局、夜間学校でも行こうかなと思っちゃった。夜間行ってバイトをすれば、なんとかなるかなと。「アルバイトをさせて欲しい」って手紙を、東京国立博物館はじめ十何カ所も書いた。いずれも丁寧な返事は来るんですが、ダメでした。蔵本・二部で歴史があるのは、立正大学しかなかったの？」

池田「いや明治大学があつたんだが、無理だった。あの頃、考古学が有名なのは明治・國學院・立正だった。

渡辺「大学に行きたいっていう話は、お父さんにはいつしたんですか？」

池田「三年の秋頃じゃないかなあ。将来、博物館の仕事がしたかったけど、その時は「大学に行きたい」っていう話だけをした(秋吉台科学博物館に通い、感化を受けた)。

蔵本「池田君は、もともと頭はいいんですよ。勉強をしなかっただけで、だからちょっと深い話もね。お互いできるんです。だけど現実の成績は、悪いんですよ。」

池田「「いずれは地元に戻ってくるから」って言って。とにかく、お袋(文子)が盛んに親父との間を持ってくれて、受験ができる事になりました。母の実兄福田家の長女成子が千葉(市原市)の宇部興産社宅に居まして、その新婚家庭に一ヶ月お世話になりました。」

まー、とにかく英語はだめでしたね。三年の時には欠点四〇点以下でして、課外授業を受けていました。そんな時、同級生で小学校時代から勉強不得意な同級生が、不思議と英語だけは上位の成績の子が居ました。私は不思議で彼と良く遊んで居まして、我が家の単車目黒二五〇ccを二人で乗り回した事がありました。親父はトラック専門ですので、我々が単車に乗るのに文句は言わなかったのが、今となっては不思議ですね。当時の県道は砂利道ですので、バスの輪ダチ以外は砂利で、そこへ単車が入ると直ぐに転倒します。重い目黒の単車を二人で起して乗り回して居ましたね。

○ 大学時代

渡辺「結局、学費などは出してもらえなかったんですか？」

池田「いや、授業料は出してくれましたよ。全部私が負担したわけじゃなくて、四年間で二〇〇万か三〇〇万ぐらいは家から出してくれたです。往復の旅費も含めてね。」

渡辺「でも、ずいぶんバイトされてますよね。」

池田「バイトはあちこちでやりましたけど、大変でした。せっかく東京行つたんだから、遊びもやらないけんし。この頃、明治大学が「偉大な平凡人たれ」というキャッチフレーズを打ち出して。これは、いまでも座右の銘です。」

渡辺「立正大学の、何学部・何学科に入学したんですか？」

池田「文学部史学科です。立正は一部・二部どっちで勉強してもいいと、それで卒業も一部・二部は明記しない。ただ立正大学を出ましたという制度になっていました。」

【写真6】

渡辺「たとえば、特定の一日でいうと、昼間はアルバイトをして、夜一七・五〇〜二一・二五に大学で二部の授業を受けて、その後、日によっては研究会などに二三時ぐらゐまで出て、それでいつ寝てるんですか？」

池田「夜の一二時頃、下宿に帰って、家でラーメンなんか食べて、一時から朝の七時ころまで寝てる。それで、この年になっても、未だ一二時過ぎんと寝られんのです。」

○ アルバイト

渡辺「アルバイトは、月にどれぐらい稼ぐ必要があつてやってるんですか？」

池田「目標も計画も立てずに、ただ稼ぎがエーという感じでやってました。バイトがエライので、時々サボったり遅刻なども多くあつた。だから生活が苦

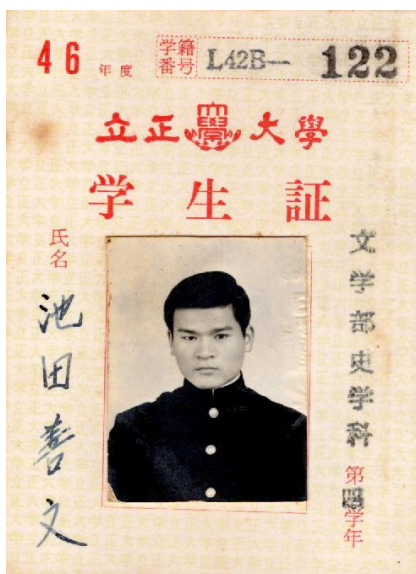


写真6 年次の学生証(1970年)

しい時が幾度もありました。あの頃、月に三万円ぐらいだったんじゃないか。家賃は、大体一階の三畳一間が月三〇〇〇円、二階だったら三五〇〇円だった。六畳でも六〇〇〇円で、大体一畳一〇〇〇円ぐらい。そのほか、一週間一〇〇〇円位あったら食べて暮らせる。即席ラーメンが三〇円位ですね。白菜四分の一の漬物が五〇円、メザシ五匹で五〇円などをオカズにしています。月に二〜三万円ぐらい稼いで、結構遊んでると思う。授業料と米は実家から送ってきて。でも米は大家が欲しがるから半分売ったり。大家が質屋をやっていたから、ついつい、カメラやテープレコーダー・切手などは流してしまっていました。学生時代の前半は遊んでますからね。高校時代の同級生達と麻雀・パチンコ・競馬。パチンコは二年位でやめましたね。三年ぐらいから真面目になった。渡辺…どんなアルバイトをやっていましたか？

池田…最初は、測量会社のポール持ちから始めて、料亭の皿洗い、ビクターのVHS製造ライン、野田の醤油工場、マンションの工事現場、餃子専門店、ジンギスカン料理店の皿洗い、ジューズ会社運送、パーテン等色々やりました。

【写真7】 神田の学徒援護会で職を探す

のですが、一日九〇〇円〜一四〇〇円位が相場でした。測量会社に入ったのは良かったですね。あれで測量するレベル・トランシットの扱いがわかる。住宅建設や道路建設で、郊外あっちこっち行きました。建築現場ではアスベストを把んでマンションの壁に入れていましたね。山形県から出稼ぎのおじさん達のバラック宿舎で、飲んだこともあります。野田の醤油工場では、おいしいソー



写真7 バー「きく」でバイト(1970年)

スなども作っていました。田園の中ですので食堂もなく、弁当箱にご飯だけ詰めていってソースを掛けて食べていました。侘しいですが非常においしかったのを覚えています。

当時、噂話がありましたね、新宿駅の西口にいくとマイクロバスが迎えに来て、米軍の基地(立川か)でベトナム戦争の死体洗いで、一日が二万円位というんですね。ただ、噂では一週間くらいメシが喉を通らないというんですね。私は反戦主義で行く気はしなかったが、浮浪者も多く居た時代ですよ。

三年から二年間は、学友(氏江敏文さん、後名寄市教育委員会)の紹介で給料制の仕事につけました。今でいうゼンリンの地図を作るような仕事をやりました。東京郊外の新興住宅街の表札を一軒ずつ見て地図を作っていくんです。犬に噛まれた事もありましたが、これは給料が良かったですね。広告料を取ってくると歩合がつくので、月給五〜六万円位ありました。これで四年生まで真面目に生活出来ましたね。

【写真8】



写真8 善文、大学一年生、立正大学の屋上にて(1967年)前列左から多田、成田、佐藤、後列石川、藤田、本間、池田、片岡、須原。

○ 大学の発掘調査

渡辺…発掘現場で技能を身につけるといえることはないんですか？
池田…二部でも発掘現場は行きますよ。発掘があれば、学友の上野精志さん(後に福岡県教育委員会)が良く情報を流してくれましたから、バイトをサボっても絶対行きました。だから、先生方や先輩方などにも、上野・池田はよく参

加するなんて言われてたんです。学生運動もしなかったし。

大学の発掘は、会費制で一〇〇〇円位会費払って参加しました。まだ大学主催です。たとえば茨城県の土浦の浮島っていう島の発掘やったときは、廃校舎を宿舍にしました。先輩・後輩の序列が強くて、夜の風呂焚きも一年生の仕事で、最後に一年生が入る時には膝下二〇cmぐらいしか湯が残ってなくて。それも上は三cmぐらい苔だらけ。それをバケツで、かわしてもかわしても無くならない。結局外に出て井戸水かぶって済ませる。トレンチは、二m四方、深さ三〇cmを二時間で掘れって

いう感じで。夜の食事時間は、一升瓶を持って先輩が酒注いで回るんですよ。相席でコップ酒の注ぎ合いです。これでお酒は強くなりました。(大学四年の日野市神明上遺跡の発掘では、男子一〇人位で、明るる朝一升瓶が一〇本くらい転がっているんで、皆びっくりしたことがありますね。)

【写真9】



写真9 善文、大学四年生、日野市神明上遺跡(1970年)前列左から池田、工藤、氏江、川原、徳嵩、斎木。後列右から一人置いて寺島、野村副手、山脇学園女学生達、後列上野

渡辺…学部生の頃、ご自分の中で関心が強かった時代・分野は？

池田…僕は卒論は「弥生時代の箱式石棺について」。でも関東地方ですからね。弥生時代の遺跡が少ないんです。関俊彦先生が当時東日本の弥生研究を代表されてたけど、そんなに遺跡もないし。だから卒論をまとめるのが難しく、結局、卒論を四年生で書ききらんで一年留年しました。

渡辺…指導教員は、どなただったんですか？

池田…久保常晴先生が指導教員で、主に関俊彦先生が弥生時代が専門でしたか

ら、その方が見られていると思います。卒論は(五年目の)一月一日にちゃんと出しました。一二月二九日頃から最後のまとめを書き、それから清書です。それまでの下書きを妹と母親が清書するので、段ごとに筆跡が違います。それでも通過しました。一〇日間でよく書いたと思いますよ。原稿用紙五〇枚位。渡辺…一〇日間で書けるんだったら、前の年に出せばよかったです。いいですか？

池田…それはやっぱり、最後のつめがない。結論は書けないです。四年の九月に九州をヒッチハイクしましたけどね。もう箱式石棺なんてみんな潰れて壊されて現物が残ってない。資料的にね。

渡辺…留年されて、その年はどのように過ごされましたか？

池田…五年目になって、千葉県の四街道で発掘調査が給料もいいからうちゅうと呼ばれたのが、パーになったんですよ。当時全共闘が反対で地主の承諾がとれなかったり、方々もめるんです。千葉に行くことにしましたから、アパート引き払っちゃって行き場がないんで、五月くらいまで後輩(工藤竹久…むつ市教育委員会、寺島文隆…福島県文化センター、真田広之…倉吉市博物館、向田祐司…広島県教育委員会)や高校の同級生(吉永五男…専修大学、岡村吉政…東洋大学)のところを転々としてました。その後、五月五日に、坂詰秀一先生の要請で日本考古学協会(成城大学)の大会に行き、宇野信四郎先生達が立ち上げた『歴史考古学』、古文書もある時代の考古学、そういう本を販売をしました。この時、成城大学の教授だった山内清男氏(縄文土器の大先生です)、赤ら顔して、やっと講演して、終わってから両方から抱えられて会場からゆっくり出て行った。未だに印象が強いですね。この人のおかげで、縄文土器がわかってたんだよね。大先生最後の講演だったので(八月に死去)、これが聴けた。

次の日に家に電話したら(それまで三月から全然電話してなかったんですよ)、母親からもう悲痛な声が聞こえてきて「父が入院してる」と、「田んぼもどうしようもないし、帰って来い。一回帰ってきてくれ」と。それじゃあ帰ろうかということ、大学での手続きやら荷物の整理。お金がないから、同級生たちにごり雪」の心境です(まだ歌はなかったけど)。それで帰ってきて、農作業をやりました。約一ヶ月、もう一・八ヘクタール全部やりました。

○ 福岡県教育委員会 嘱託調査員時代

田植えを終えた頃、福岡県教育委員会に就職していた上野精志君から電話があり、発掘調査員を募集しているので来ないかと。福岡に行けば卒論もなんとか書けるかな、という気持ちもあり行くことにしました。給料も結構良かったです。七分分が七万五千円。東京でも五・六万円の頃です。一日三〇〇〇円(日当一五〇〇円・出張費一五〇〇円)です。博多から福岡まで毎日出張するっていう感じで、つけてくれたんですね。最初一週間か一〇日は上野君の自宅に居候して彼の車で通勤してましたけど、そのうち福岡町に下宿を借りて、そこに住むようになりました。松岡史先生が担当していた「福岡バイパス」の発掘調査です。

一月に、久保長崎遺跡で「銅戈の鎔範」を発見したんですよ。それまで砥石として扱ってたんですけど、泥ついたまま置いてたのを作業員さんが洗っていると、なんか黒いものがついてるっていうから。見たら銅剣かなんかの型かと思いました。黒い焼け焦げがついてて。当時、住居址で時代がわかる遺跡からその鎔範が出たのは初めてだったんです。時代がはっきりするということで大ニュースになり、九大等から先生方が沢山これらしました。

【写真10】

これは、鑄造用のマネ(真土)を貯蔵していた土坑の隣を実測している写真ですけど、ここにマネがあって、その白い粘土のようなマネを鑄型に塗って銅を流し込む。その真土が久保長崎にあったんですよ。確かうん。僕は報告書に書いたと思いますが、こっちに帰ってきましたから。報告書は二、三年後に出た



写真10 福岡県久保長崎遺跡で土坑の実測中(1971年)

んですけどね。

一二月には初めてセスナに乗って、大分空港から福岡全体を。遺跡は全部写真撮って歩きました。国東半島の上空ではエアポケットに落ちて二〇〇mぐらい。心臓が爆発しそうになったこともあります。

渡辺：色々活躍されていますね。それで、肝心の卒業論文は、どうなったんですか？

池田：卒論は、一二月二八日から二九日から一月九日までやって、元旦の日だけは蔵本君の家へ行って、飲み明けて二日間寝た。あとは妹・京子・母・文子に下書き原稿の清書を頼んで、九日に出来上がってすぐ急行で上京して、一日に研究室の坂詰先生達に提出。一七日に久保教授の面接(口頭試験)がありました。ほとんど雑談でした。そのあと一月中・下旬は、いろいろな友達やなんか、もう長い間ありがとう、ありがとうで、お礼参りに廻った。一九日には山口に帰った。その後、二月一日からは、また福岡県教育委員会で発掘の整理をしなきゃいけない。福岡バイパスの調査報告書づくりで。それで二月二日から一カ月は、太宰府天満宮の飛梅会館について、天満宮の研修生たちが寝泊まりする会館があるんですよ。その一室を世話してもらって、寝泊まりしてたんです。研修に来ていた神官たちが一〇人位おりました、

神殿に上がった御神酒を毎晩飲む、それが彼らの役目でそこに誘われちゃうんです。「これはたまらん。とても原稿書



写真11 太宰府発掘調査事務所で(後方の山は大野城跡) 前列左から副島、森田、上野、池田、松岡史先生

けん」と思っ、三月には出てきました。

太宰府のあのプレハブの発掘調査事務所の一角。ここで三月だから何とかストーブで、まあ夜も寝れるから。で土器等の陳列棚の二段目をベットにして、そこで一か月間寝泊まりしてました。それが整理作業のおばさん達が、せっかく土器を接合して並べていた所に、上から酔っ払って落ちて、土器がクツションで怪我はしなかったけど、土器がめっちゃめちゃで、怒られたことがあります。夜は二日市に飲みに行っていましたからね。

報告書も書き上げ、四月には美祿に帰って、一日に美東町教育委員会に出勤ということになります。

【写真11】

○ 美東町教育委員会に就職

渡辺：ようやく地元での就職ということですが、そこまでの経緯をお話しくさいます。

池田：前年一〇月に美東町の役場を受験しました。うちは、すでに妹が役場で働いていたんです。で、一家から二人は採用できんという暗黙のルールがあったんです。じゃあ妹の方が辞めようっていうことになって。長男の方がいいから、長女はどうせお嫁に行くんだからって。ちょうど中国自動車道の建設工事があった、事務員が引っぱりだこだったんで、妹は中国縦貫道の戸田建設の方へ再就職しました。

そういう経緯だったから、自分は妹の代わりに入ったのかなと思っていたんですけど、最近、町役場の移転で公文書類を整理していて、当時の採用の文書を見る機会があり、三〇人位の役場受験で私が一番の成績であったので安心しました。でも未だに覚えてますが、面接で田辺町長から「学生運動の最中に何しとったかね」とって質問されてね。ちょうど東大安田講堂事件なんかの頃で入った年の秋は浅間山荘事件でしたから。僕は真面目に勉強してましたし、学生運動には関わっていませんって答えておきました。

渡辺：「教育委員会じゃなければ就職しません」と意思表示したそうですが、自分が面接する側だとして、そう言う人がいたらどうします？

池田：面と向かっては、言ってませんよ。前もって、町会議員なんかの紹介も

あるんです。この人が受けると、その際にそういう意思表示をしたら、「ちょうど教育委員会で空きが出るよ」ってちゅう感じで入ってたんす。運が良かったですよ。

渡辺：逆に言ったら、教育委員会のポストに空きがなかったら、受験しなかったということですか？

池田：うん。福岡県の教育委員会で「もうちょっとおいたら正規採用になるぞ」って言われてたから。本当に運ですよ。荷物運搬は親父がトラックを持ってましたから、福岡まで来てくれました。親父がこれで息子が家に帰ってきたと、そういう認識ですね。私も親父の回復が気になるので福岡に居る気はなかった。

実は集落でも、後取り息子を大学まで行かせて何にするのかって言われてたらしいんですよ。当時の風潮として、男子は後を取らせて百姓を継がせて、身近でそれなりの仕事をさせるほうがいいんだという考え。今と違ってみると、自分にもよく分ります。いま自分の息子(兄弟で京大卒)が東京と大阪に行って、帰ってこない。自分のことは自分で決めるという事は理解しながら、この歳になると「ああ、しまったな」とも思うので、当時、親父が周りの人からそう言われてたっていうのはね、よく分かりますね。

東京の大学を卒業した訳ですから、とにかく、ああこうだと噂話になりますね。僕はコウモリ傘の細いの持って役場に行ってた。一年目はまだ免許を取ってないんで、バス通勤でしたから。梅雨はやっぱりコウモリ傘を持ってステッキ代わりに歩くじゃないですか。そうすると、まあ都会のジェントルマンが通っているとか、なんとかかんとか町で噂されたらしいです。

蔵本：池田さんは、ダンディですよ。オシャレですよ。僕らと全然違う。そういうところが全部、都会に関係付けられてキザのやつだった話になっちゃう。都会に行かなくても、キザだった可能性はあるわけ。高校時代から、きちっと学生服を着てたり。

渡辺：ともかく結果としては、よかったじゃないですか。大学に行くっていうのを、止めにくい時代になり始めてたから、お父さんも渋々認めてくれた訳でしょうし、四・五年前だったら、ダメだったかもしれない。

池田：うん。同級生も東京の大学で何年か居た者もおりますけど、最終的にはみんな帰ってきてます。あの当時、高度経済成長の時代で、沖縄返還もあるし。

まあ、田舎で暮らしていてよかったんじゃないかと思えます。

○ 美東町教育委員会時代

渡辺…役場でのお仕事について、お話しください。

池田…一九七二年四月一日から美東町教育委員会勤務です。当時、同年代の若者たちが活発に大田公民館をたまり場としていて、私も公民館の宿直が交代勤務でしたから、自動的に青年団にも入りました(大体三〇代ぐらいまでで、みんな結婚したら辞めていってました)。二

〜三〇人ぐらいいたかな。これは古い時代で言うと、若衆組みたいなイメージで、その続きですわ。それが戦後教育で民主的な感じで、社会問題もやる。秋芳の方では、同和問題もやってました。



写真12 職場で(1973年)

【写真12】

四月に、山口考古学会が設立になったんです。一年前から準備会やってました。私も準備会の一人でしたから、山大の小野忠熙先生などは専門の研究者ですけど、後ほとんどは中学校・小学校の先生。高校の先生はそんなに多くなく、三人か四人位でした。みんな山大教育学部卒業で、小野先生の考古学研究会に入っていた人達、そういう人達がちょうどこの頃、中国自動車道の建設のラッシュで事前調査をあちこちやらんといけん。そのうち新幹線の工事現場も出てきますから、そういう緊急調査用に学校の先生方が出向させられて県の埋蔵文化財センターへ(ずっと後にできますけど)、その職員として四〜五年勤務という体制が長く続きました。

渡辺…そういう方々は、いずれ学校に戻ると思っていたら、そんな真剣に発掘

の方はやらないっていうことですか？

池田…いや、自分が希望されて入った人が多いので、真剣に勉強されていたと思います。でも期間が短いので専門性はあまりないです。稀には居られました。

渡辺…その頃、池田さんほどのような仕事・活動をなさっていましたか？

池田…当時、『美東町史』の編纂中で、それがあつたから僕も教育委員会入れたと思うんだけど、「池田君が考古学やってる」つちゅうのを編纂主任の阿武先生(私の頃の中学校長)が聞いて、錢屋の井戸を掘ろうじゃないかっていう話になった。地元には、その古井戸の底で隠し金「寛永通宝」を作ったという伝説があるんですね。江戸時代頃の井戸は直径八〇cmぐらいですわ。やっと潜り込むことができるぐらいの石組作りで、そこを発掘する。一人で降りていって図面描いてやったことがあります(結果は無論、隠し部屋など無かったです)。

○ 青年団活動に熱中

池田…この頃、自分の集落に神楽舞があつたんです。それが戦後、二五年ぐらい廃絶していて、そんな古いものはやらんでいって、戦後の民主教育の一環で廃れてしまった。それが六月頃、地元の消防団に入った若い者が私も含めて三、四人居まして、それらに麻雀を教えて、集落から不評を買いましたが。八月に大正洞でテレビロケがあるが、郷土の芸能を何か探しているという情報が青年団にありまして、私が文化部長をしていましたから聞波区で挑戦してみようということになって。急遽お年寄りに習って、七月からずっと練習をして、出演しました。それが二五年ぶりに神楽舞を復活したつちゅうので、大変な人ばかりでした。当時「青い三角定規」というフォークソンググループと話す事が出来まして、町内で最初のロケとなったのです。

渡辺…この神楽前はどれぐらいの年代の人が覚えてたんですか？

池田…当時うちの親父らの世代ですから、五〇歳ぐらいの人が二〇歳頃にやったのを覚えてて、それを教わるという感じね。戦前には二七、八歳頃に覚えてたっていう。一〇年ぐらいで覚えますからね。

渡辺…若い人がやるものなんですか？

池田…主に、二〇歳前後。その家に若手が出れば引き継ぎます。曲目は、池田

家は「薙刀」の家系でした。曲目の配役がだいたい決まっています。あそこは鬼の家系だからとか、それは家で教えてもらえるからって。その集落の神社の拝殿とか境内で練習するけれども、それだけじゃ覚えられなくて、家に帰っても教えてもらおう。そういう経緯があるんで、他の人の家のものはあんまり分からない。ただ、あっちこっちやった人もいて、いろいろな曲目を見てますからね。仕草は四パターン位が基本で、その組み合わせや、順番も大体覚えてる。だから六〇歳ぐらいの人はよく覚えてますね。

全部で二二曲あるんですよ。で、そのうちの一曲を大正洞で、TYSかKRYか覚えてないんだけど、初めてテレビ出演した際は、大変な評判になりましたね。それで町内各地の神楽舞も、うちもやろうって。その地域の青年団員が中心となって、これがきっかけで美東町であと四カ所ぐらいの神楽舞が復興しました。復活にはさらに四、五年かかりましたけど、我々の活動が切っ掛けになったのは確かです。

【写真13】
で、一二月には間波集落全体で全部復活しようということになりましたね。結局、四〇歳ぐらいの人たちも皆参加して、一二曲全部を復活させました。ビデオに撮っておけばよかったですね。

一二曲ってというのは、一二軒で継承してきたということじゃないです。僕らは一人三役ぐらいやります。僕なんか三曲ぐらい舞ってます。一曲がだいたい二〇分から三〇分ですから、夜中の二時ぐらいまでかかりますよ。ただ、テレビが娯楽の時代ですから、郷土芸能なんか田舎臭い、大したことないという感覚ですね。それで廃れていったのもあります。まあ、今は文化財に指定されて、



写真13 神楽舞でテレビ出演(1972年)

補助金があるからやってるっていうのが多いでしょう。練習は三〜四週間、二〇日ぐらいかかります。大変ですよ。まあ、消防団の練習に比べたらまだいいかも。それはもう体力と業の習得ですから、厳しいですよ。夜八時から一時までね。

池田…その後、青年団では、美祿郡の青年団連絡協議会の会長になり、秋吉台での「山口県青少年一万人キャンプ大会」を行ったり、一九七七年三月に女房と結婚しました。

【写真14】
その年の秋には、大津郡(団長…大西倉男、後の長門市長)から引き継いで、美祿郡で「山口県総合青年大会」を引き受けました。随分反対もありましたが、何とか美祿郡内五つの青年団を纏め、約三〇〇〇人が美祿高校グラウンドに集合し、文化・スポーツなど数十部門で活躍し、その内二〜三のグループが優勝して東京で開催の全国大会に出場しました。良き体験となったと思います。引き続き一月には「第二回山口県青年の船」の企画部長に抜擢され、香港・マニラなどを航海しましたが、これらは、新婚早々大変でした。女房には随分と迷惑というか、頭の下がる行動をしていました。一二月には出産予定でしたが、女房が頑張って、長男(聖)誕生の一週間前には何とか帰国できました。このことは、今でも、頭が上がりませんよ。



写真14 道子と愛車(我が家で) (1977年)

○ 長登銅山跡との出会い
渡辺…いろいろな活動をなさっていたんですね。この時期には、発掘関係の話はないんですか。

池田…一九七二年九月に長登で須恵器を発見したというので、町史編纂の阿武

先生たちが土器片を持ち帰る。それを見て、「あ、これ奈良時代の須恵器だ」と。これはひよっとしたら、長登と奈良の大仏に関係する伝説は本当かな?と思いました。僕は大学時代、考古学実習で約一ヶ月須恵器窯を発掘した経験があるし、須恵器はだいたい見てましたから。もう奈良時代だと、だいたい分かった。これが考古学への道を開いてくれた。それまで、考古学をするのはもう諦めていました。美東町は山間部で、めぼしい遺跡もこれまで知られているものはなかったですし。

当時は、発掘は遺跡を壊すから、発掘はしないで、後世に残しておいたほうがいいという全共闘の考え方もあって。それも、たしかに一理あります。そういう発掘＝遺跡の破壊という発想もありましたので、発掘するならいろんなデータを事細かく記録して保存しておかないといけない、まず測量を地形測量からして順番にやっていかないとけないという感覚は持っていました。だから発掘するには、その地域全体を測量して、現状がどうなっているかを把握しようと、まず測量を始めました(地形測量地図が五万分の一しかなかったので、せめて1/1000、1/2000の地形図は必要でしょう)。

ところが、現場に大きな松の木があって。スタジア測量でテープを行ったり来たりさせるんです。その平板からまっすぐ見えないといけないから、木があったら邪魔だから、またテープ持ってきて、またこっちに行ったりする。距離を測る為にね。美東中に歴史クラブみたいなのがありまして、岡山先生のおかげでお手伝いしてもらって、一二月の冬休み・三月の春休み・夏休み、二年ぐらしかかりました。

一九七三年四月には美祢高の郷土研究部の松ヶ迫遺跡の発掘が始まったんです。家庭科室を作る事前調査です。山口県教育委員会社会教育係の仕事ですが、私も考古学を専攻していましたので依頼がありました。

五月には『美東町史』編纂が完成するつちゅうので、文化研究会が発足しました。体育館建設も終盤でして、当時の美東町教育委員会は大変でした。

一九七四年は手帳が残っていないから、何をやってたのか詳細は分かりません。まあ三年目ですから、やっと教育委員会も慣れて、文化財関係やら体育館の開館もありました。『美東町史』の刊行も一九七四年です。なんやかんやでバタバタします。田辺町長が入院してましたから、秋吉台関係の「現状変更

意見書」は町長決裁で、病院通いが続きました。秋吉台の建物をちよつと修繕するには、教育委員会が現状変更を判断するのですけど、秋芳町と美東町と山口県と三者で秋吉台に関するマスタープランを作ってまして、それにはいずれ秋吉台展望台周辺の店は撤去することある。なぜかという、一九七〇年に秋吉台有料道路ができたんです。この道路を作る条件として、そういうことになった。でも既得権があるし、とても実現不可能な話です。この問題は僕が課長の時にも検討したけど、やっと五年前に今の美祢市教育委員会が取り組んで、現在ある建物はそのままいいということになりました。

○ 初期の発掘調査

渡辺…そういうお仕事を進めながらも、すこしずつ今に繋がる研究を始めていたんですね。

池田…この段階で、池田君がなんか鉾山掘っているという話が、少しずつ知られていった。ただ地方の事で、考古学界にもそんなに注目もされなかったようです。

渡辺…鉾山が、遺跡という発想・感覚がまだない時代ですね？

池田…そう。それまでには長登銅山の平安時代の炉跡発掘や兵庫県石垣山遺跡の調査などがありましたけど、そういう風になるのは、東大寺の大仏鑄造関連遺構の発掘調査のインパクトがやっぱり大きい。

渡辺…それにしても、今までに長登以外でそんな本格的に掘られるところはないですね。

池田…ええ。やっと最近になって於福金山遺跡とか。生野銀山で、つい二週間ぐらい前かな？ 江戸時代の吹床が出てきた。これまで古代に目が向いてたんだけど、なかなか遺跡がない。今後は後の時代も含めて、技術面でどういう発展過程があるかを見極めなきゃいけないです。

渡辺…さきほど井戸を発掘した話がありましたけど、この時期、これ以外にどのような発掘をしましたか。

池田…一九七三年かな。長登を掘る前に、塚を掘ったんですよ。「古墳じゃないか」って地元の人がいうから。高さが一・二m位しかないから、「古墳じゃ

「ないな」と思っただけだ。それで美東町で最初の正式な発掘調査をしたんです。ところがその折り、○○新聞の山口版でしたか、「掘っても掘っても石ころだらけ」というタイトルで、掘っているけど何にも出ない、出てくるのは石ころばかり。それでも地元の人は何か期待してる？ という記事を書かれてしまったことがあります。ちょっと憤慨しましたが、一九七五年位まではそんな時代ですよ。

考古学に対する一般人の感覚は、一九七二年に高松塚古墳がバートと注目されたけれども、それは都の近くの話であって、地方でそんな発掘じゃなんじゃって、そういう時代です。だから中国自動車道路と、その後の山陽新幹線もできるから、国が法律上しようがないから事前発掘やってくるって、そんな感覚です。専門員も防府市に一人、山口県に二〜三人位です。当時の僕も専門員じゃないです。事務職として、役場職員として入ってる。そんな時代です。一九七二年、七三年、七四年ってのは。

その後、一九七七年には、観光課の職員の話から「末原須恵器窯跡」を発見・調査し、一九七九年から圃場整備の工事で、鳳鳴小学校生徒が三戸和彦先生の影響で土器を発見し、緊急調査を小学生たちと共に行いました。一九八一年には、山口教育委員会が鉾山跡の県下分布悉皆調査を開始し、私が美東町地域を担当しましたが、この時に、採掘跡の新旧の判別が直感できるようになったことが、大きな成果となりました。二年後に「長門国採銅所の予察」として、奈良時代の採掘跡を予見しましたが、一九八五年には山神製錬遺跡の発掘調査や大切製錬遺跡から平安・奈良時代の土器を発



写真15 山神製錬遺跡の発掘調査と葉賀先生(1985年)
左から河本管理員、池田、葉賀、地主:大庭、佐久間。
後列望月係長

掘して、長登銅山跡が古代の遺跡であることが確定できました。

【写真15】

○ 美東町役場税務課時代

渡辺…そんなかで、配置転換されたんですね。

池田…一九八二年、教育委員会の勤務が一〇年経ったので違う部署にもということで、税務課へ行きました。前の部署と違って、土・日は休みが多い。休みを取って家族旅行もあちこち行けるようになりました。ただ、ここは大変な職場でした。わたしは固定資産税係でしたけど、固定資産の評価・課税と共に、税滞納整理も兼務の職場です。だから夕方から、この滞納整理に滞納者の家を歩いてお金を集めて回る。これが大変です。気持ちが大変です。係長(宮崎保)が僕の結婚仲人として、ツーカーで二人で組んでやりましたけど、まあ夕食で晩酌をする頃に行くわけですから、まあ散々罵られて悪口言われたり、各課のいろんな悪口を聞いて回りました。そういう苦労をして、結局、じゃあ一〇〇〇円・二〇〇〇円と払ってもらおう。そんな状況でね。ある時には、一日で二〇〇万円も取り立てました。サファリパーク関連の会社が潰れて、その会社の法人税です。ある寿司屋に行った時には、刺身包丁を胸先まで突き出されました。「これで休暇が取れる」と思いましたね。あれで肝が据わりました。その次の年に僕は係長になって、支払い気力のない人には、やむなくどんどん電話債権などの競売をやりました。町長が「競売はもうやめてくれんかな？ わしの名前でやるのはちょっと」と言われましたが、断りました。債務整理は公務ですからね。

渡辺…この町長さんは、後で発掘にちゃんとお金出してくれたという方と同一人物なんですか。

池田…うん。「わしの名前でやるの、止めてくれんかな」というのが、本音だったと思います。おかげで、毎年僕の年収ぐらいいは集金整理しましたよ。やっぱり、職員になったら滞納整理は経験するのがベストですね。二割ぐらいの職員は経験してると思う。そうすると、お金を大切に扱おうって心ができる。一応、税金の収入がよくわかり、町の行財政が理解出来る訳です。

渡辺…こういう大変な部署に勤めながら、組合活動もなさっていたんですね。池田…組合は書記長を三年務め、副委員長、委員長までやりました。とくに僕らの時代は、社会党支持ですかね。選挙になると、もう必ずよその自治体(自分の自治体はできませんから)に行つてポスター貼るとか。ただ一九八六年ぐらいから、財政が困窮してきました。三カ月給料延伸を呑んだり。あと、私が副委員長の時は、一年間、一号俸を下げるのに同意したりしました。地方財政を分かつてましたから、地方交付税がどんどん減つてきましたから、どうしようもない時代でした。地方自治体は今にも潰れるなどという時代。

でもね、この後の竹下首相の一億創生(※一九八八年度)で息吹き返しました。「頑張つていけば、できるかなって」いう感じになつてきましたね。美東町は温泉掘ったんですけども、まあ一〇〇m掘るのに一〇〇〇万円ですからね。で七〇〇〇万円までやつたんですよ。いや五〇〇〇万円払つたら出るちゅうのでやつたけど。七〇〇〇万円までやろうつていうのに、業者と今度は折半で七〇〇mまで掘つて、秋吉台の石灰岩がありましたけど、その深さが七〇〇mつていうのが初めて分かつたんです。地質学的にはビッグニュースです。七〇〇〇万のうち一〇〇〇万円は業者が出したようので、(温泉掘削に使つた費用は)六〇〇〇万で、残りの四〇〇〇万は観光地の看板作つたり、長登銅山の説明板を作つたり、「美東長登太鼓」のグループを発足したり、色々なそういうソフト事業をしましたから、あんまり損はしてないです。温泉もトロン温泉にして、たくさん客が来ました。あの一億創生ちゅうのは、全国で半分は成功したんじゃないですかね?そこへ新しく長登銅山ちゅう奈良の大仏との関係が出てきたんで、これはなんかいけるか分からんという、希望の光が出てきたんです。

それまで、美東町は奥秋吉台という観光地を宣伝していましたが、新たに長登銅山跡が入ってきた訳で、新たな期待が出来た訳です。これまで、秋吉台の観光収入は秋芳洞で、秋芳町が牛耳つていましたからね。

渡辺…ただ長登つて、もし観光客がコンスタントに来たとしても、地元にお金を落とすようなコンテンツじゃないですよ。

池田…まあ、ジオパークにしても、観光課にしても、長登銅山を売り出そうちゅう思考はない。それは教育委員会が管轄しちゃうから、あくまで教育的な範囲

に限られます。でも、それでいいんじゃないでしょうか。郷土の誇りの一つとしての価値、観光というのはその土地の「光」を観るということでしょう。今年春、地元美東中学校生徒が東大寺の大仏特別拝観(東大寺の計らいで、奈良大仏の台座の上まで登壇させていただける。)の後に、東大寺大仏殿で、外国の観光客に英語で「大仏の故郷・長登銅山跡」のガイドを行ったということ聞いて満足しています。今後も青少年に郷土の誇りを伝え、伝承して、自身の誇りを会得していただければ、先人の残した財産を受け継いでいくこととなるでしょう。

②長登以降（二〇二五年一月一五〜一六日間き取り）

○ 東大寺大仏殿境内の発掘調査と長登銅山跡

渡辺…今日のテーマは、長登銅山の発掘に関する事です。先ずは前史に当たる東大寺大仏殿回廊西遺跡の発掘（一九八七年度）について、直接関わった佐藤信（一九五二〜）さんからお話をお願いします。

【写真16】

【写真17】

佐藤…大仏殿回廊西遺跡は、私が文化庁にいる時に（一九八五〜八八年度。遺跡発掘の時は文化財調査官）、奈良県において発掘してもらいました。当時、「なら・シルクドロード博覧会」（一九八八年四〜一〇月）のために急いで簡易トイレを作る必要があって、奈良県教育委員会は「ここは中門に向かって谷が入っているし、何も出ないだろうから、発掘調査はなしで」と現状変更願を出してきました。

でも私と奈良県の担当の今尾文昭さん（榎原考古学研究所、考古学）の二人は、「ここは絶対発掘しなくちゃダメだよ」って意見が一致して、発掘してもらったんです。そうしたら、遺物が大量に出てきたんです。大仏を铸造した時は、大仏はてっぺんまで土をかぶっていた訳で、その土を押し出して西側の土地を造成したんです。そこから铸造の時の型だとか、鋳滓だとか、炉壁だとかが出てきたので、私と今尾さんは「掘ってもらって良かったね」って思いました。渡辺…奈良に色々な発掘機関があるなかで、この際の発掘を榎原考古学研究所（奈良県）が担当したのはなぜですか。



写真16 池田善文氏



写真17 佐藤信氏

佐藤…奈良文化財研究所は平城宮遺跡とその周囲一〇〇mぐらいの近いところの担当で、条坊の中は榎原研か奈文研か奈良市が相談して決めます。東大寺は伝統的には榎原研の担当です。市の事業で水道を掘るとかいう場合には、市がやることもあります。

この遺跡では、光明皇后から大仏铸造のために上質の銅が供給されていたことを示す木簡も見つかりました。その頃までには、大仏殿の方の調査成果から銅の成分分析を榎原研で実施して、砒素の成分が多いので長登産の銅だという分析結果も出ていたと思います。

渡辺…成分分析の話は、いつころ聞きましたか。

【写真18】

佐藤…成分分析の話は、松村恵司（一九五〇〜）さんを介して、早い段階で榎原研の方から聞いていたと記憶しています。

池田…僕なんか、当時は長登と東大寺が結びつく史料的根拠なんて、まず見つからないだろうと思っていましたので、驚きました。

佐藤…でもその前から、長登は「奈良登り」の訛だという説が地元にはあったじゃないですか。

池田…奈良には登っただろうけれども、大仏の材料として使ったかどうかまでは…。

佐藤…確かに、奈良で何に使ったかまでは分からないか。ともかくも、これで光明皇后宮から大仏の原料として上質の銅が提供されていることが確認されました。その後、長登の方から太政大臣家に送る銅という木簡が出ました。太政大臣（父藤原不比等）家は光明皇后が伝領しているので、長登銅山から光明皇后



写真18 東大寺発掘調査現場（左から山本会長、池田、中井一夫、岩本主事）（1988年）

に銅が送られて、光明皇后から大仏鑄造の際に東大寺へ提供されたという構図がハッキリしました。

池田…佐藤先生が、長登銅山―光明子―東大寺大仏という繋がりを、文字史料から解明してくださいと、見通しが付きました。科学分析の資料は、数値が完全に一致するわけではありませんし、よく似ているなどという感じのレベルですから、これだけで証拠資料というわけにはいかない。それが、佐藤先生の研究によって、長登の銅が大仏に使われているということを言えるようになった。色々な銅も混じっているだろうから、全体としてということではあります。

渡辺…この光明皇后が銅を供給したという話は、面白いですね。銅は鉄と比べて用途が限定されますから、私なんかは、光明皇后が自分の倉庫に銅のインゴットが溜まっていく状況を見て、「こんなに一杯どう使ったらいいのかな」とって悩むなかで、大仏造立を思い立った可能性もあると思っています。

ところで少し話がずれますが、いろいろな産地の銅を混ぜた場合、数値そのものが変化するんですか。それとも、例えばハンデいの蛍光X線を大仏の蓮弁あたりに当てた場合、検出箇所毎に産地由来の違う数字が出てくるんですか。

池田…やってないから分かりませんが、やってみたらいいと思いますよ。

佐藤…各地から集まった高純度の銅原材料を炉にくべて、下の方から何回かに分けて鑄型に注ぎ込んでいるから、混ぜてしまったら、ここが長登産の銅で、ここは別の所なんていうのは分からないんじゃないかな。もし私が鑄造現場の工人だったら、ここは長登だけの、ここは別の場所のだけはしないで混ぜますよ。

渡辺…ああ、均質性の追求か。場所によって、色が違っていても嫌だしね。

佐藤…そうそう。ここだけ頑丈で、こっちは頑丈でないみたいなのも嫌だから。ただ螺髪は後から付けるから、あそこなんかは産地が違う場合があるかもしれない。

池田…東京芸大が一九六七年に大仏の内部に、鼻の穴から入って調査したそうですが、非破壊でもう一回調査してみるのも手でしょう。

渡辺…話を色々伺っていると、長登ももうすこしテコ入れしないとまずいけれども、東大寺大仏をテーマに基盤研究Aとかそれ以上のクラスの科研を採っ

て総合研究に取り組むようなネタが一杯残っているんですね。調査機器も、どんどん進歩していることだし。

佐藤…その通り。その通り。

○ 文化庁時代の佐藤信・松村恵司

渡辺…佐藤さんが、長登銅山を意識するようになったのは、いつ頃ですか？

佐藤…私は一九八五年四月に奈文研から文化庁の記念物課に移って、一九八八年当時は文化財調査官をしていました(一九八九年三月まで在籍)。その後、一九八七年に、松村恵司さんが奈文研から文化庁の文化財調査官として埋蔵文化財部門に來られた(一九九五年まで在籍)。当時、松村さんも私も、池田善文さんの存在を念頭に、二人で「長登はぜひ将来調査して、国指定史跡にすべきだよ」という話をしていました。

長登銅山の発掘・研究が進んだ背景として、池田さんの存在は大きいと思います。例えば、チャンスがあっても、そういう人がいなくて、手がつけられないまま終わってしまった遺跡もある。ただ勿論、先立つものも必要で、たとえば池田さんが発掘するためには、当時の美東町が調査体制を作って、調査費用をどうするか決めてくれないといけない。当時は県が間に入っていたから、県も予算を出す。全予算の半分は文化庁から出すけれども、具体的には松村さんの担当する埋蔵部門から出る。で、史跡指定については私がいた史跡部門で担当する。当時は仲野浩(古代史)さんという文化財部の主みたいな、主任文化財調査官という偉い方がいました。古代の史跡は遺跡部門の方で(私は古代で、服部英雄さんが中世だったんですけど)、担当するっていう話もあったので、松村さんと私が「とにかく、一緒にやりましょうね」という話をしていたのが一九八七年以降のことです。

○ 長登銅山跡の初期の発掘調査

渡辺…ところで池田さんが、鉱滓が4mも積もっているあそこを発掘したのは、いつでしたか。

池田…一九八五年の三月と七月ですね。三月は一〇世紀後半の火床炉、いわゆる吹床が出た。でもそれは日本最古の鉛の精錬炉でした。その頃、兵庫県の

石垣山遺跡(近世初頭)の発掘が始まり、初めて銅製錬所の跡が発掘されました。その頃、長登では一九八五年七月に鉄砲水で道が壊れて、須恵器がドッサリ出てきたんです。奈良時代の須恵器もたくさん出ました。今の大切地区の中心地です。その後、二年くらい経って、一九八八年二月に東大寺の発掘があったんです。

当時私は税務課に居まして、確定申告の忙しい時期でした。NHK奈良放送局の毛利和雄さんから電話があつて、「東大寺の発掘で奈良の大仏の銅が長登銅山産ということが分かったので、取材に行きたい」ということで、私はびっくりしましたね。報道規制が取られているからということで、誰にも言えない苦しい日々を一ヶ月過ぎました。そして三月二〇日に報道となりました。

【写真19】

それからが大変で、美東町では、慌てて「どうしようか」となった。それで「まず試掘調査が必要だ」となって、町議会も承認して開発は後回しという英断が下りました。それで八八年八月に、二m×四mのトレンチを掘って「大家」という墨書が出たんです。

この時、私はまだ税務課に居まして、一週間程調査したのですが、土層の断面図が出来ていなくて、九月の日曜日に高校時代の後輩の水島稔夫君(下関市教育委員会)が訪ねてきたので、彼にも断面実測を手伝ってもらい断面を清掃した、そのときに出てきた須恵器です。その後水洗して墨書が見つかったのです。この年、一〇月には松村さんが調査官として、現地に来られました。佐藤…分かりました。それで、色々な話がつながってくる。

池田・松村さんは「これを八木充(山口大学)先生に言つて、指導を受けたら



写真19 NHKの取材(左から兼重係長、三人目毛利、池田)(1988年)

どうか」と仰った。それで、八木先生に指導をお願いしました。NHKが当時、赤外線カメラを名古屋放送局が持っていたので、山口放送局に持ってきてもらつて、木簡の文字が「大家(おおやけ)」と釈読された。それで、翌年から国の補助金がついた。こうして一九八九年に、本格的な調査が始まったという次第です。

渡辺…長登を語る際に、文化庁側のキーパーソンとして佐藤さんと松村さんの名前が出てきますが、お二人の関係について教えてください。

【図1】

○ 当時の佐藤・松村両氏の思い出

佐藤…一九八九年は、松村さんは文化庁の文化財部門にいました(一九八七～九八年に在籍)。私は八五年から八九年まで文化庁にいたんです。その間、松村さんと一緒にしました。奈文研でも、平城宮の一三九・一五四などの発掘で同じ現場班でした。当時、同じ官営工房の研究で、法隆寺の百万塔の調査にも携わっていました。この調査は考古第一の松村さんと史料調査室の私の二人がセットで、補助員の女性二人を連れて法隆寺に毎隔週ぐらいで行つて、一週間つめるんです。松村さんたちは爪の形とか高さとか径とか、どこが壊れているかを調査する。私は、塔心部の底と一番上の傘のところ、それから九輪部の塔心部の底と上の傘のところ墨書があるのを赤外線テレビにかけて読む。そういう作業を、朝から夕方までやりました。

法隆寺の百万塔四万点を全部調査するのは、本当に大変でした。お昼ご飯を食べた後ぐらいは、発散したい。松村さんと私は仲が良かったので、昼の休憩時間に講堂のところで、バトミントンをしました。移動式の黒板をネット代わりにするから、相手が見えない。相手が見えないところで、すごく近くから打ちたりして、相手を騙そうとする。そういうことを、やっていました。

これは誰も見ていない奈良時代の墨書資料だから、一週間調査したら、第何号の底面にはこういう文字があったという記録を一〇部ぐらい簡易製本して、法隆寺と考古第一・考古史料・図書室といくつかのところに配りました。それは第一次調査で、部外に発表するには法隆寺さんの許可がいる訳で、外で大っぴらには発表できなかったんです。ただ笹山晴生先生から「史学会で報告して

ください」って言われて(あれも木簡の一種ですから)、お寺の許可を得たいいくつかの積文などを報告したことがあります。その時、会場の上の方に竹内理三先生が座っておられて、「ハイ」って質問をされて、「この成果は、いつ頃公表してもらえるのか」って。「四万点という数も大変だろうし、お寺との関係ありますが、できるだけたくさん公表して」って言われました。竹内先生は自分が生きている間に『寧楽遺文』に木簡を全部載せようとしていたわけですよ。百万塔の墨書も載せたいという気持ちがあって、早く公表してほしいという気持ちを込めた質問ですね。そういうこともあって、「これは本当に心してやらない」と思いました。

調査のなかで考えたのは、同じ百万塔を作る工房のなかで、どういう管理をしていたのかという問題です。墨書には「雲・二・三・八 赤人」、つまり年号・日付・担当(これはいろんな意見があるんですけど、担当の工人か工人の長官が名前を書いているんだろうと)が書いてある。そして、工房には左と右があります。こうした情報から、律令国家が同じものを百万機も作る時にどうしたか考えました。百万塔は木地師が使うような轆轤で作るから、松村さんが調査している爪の形を見れば何台轆轤があるかが



図1 長登銅山分布図

分かる。それから、私が調査した赤人の轆轤がこれだとすれば、轆轤が属人になるわけです。工人が一人ずつ自分の工具を持っているのか、同じ工具を何人かの工人が順番に使っているのが分かる。そういうことを一週間、法隆寺行ったら朝から夕方までずっとやる。昼休みには、何か楽しめないかと…

作業をやっているのは、百万塔が白土に蔽われて真っ白なことです。

作業の最終過程で白土をかけているので、その下に書いてある墨書が読めない。だから調査の際には、筆を持って行って白土のところをちよつと払う。埃を払うのはストレスないんだけど、埃を払うだけでは読めない。でも、近い将来、重要文化財になるかもしれないもの白土、古代の工人が塗った白土はできるだけ落とすという気持ちもある。だから、ちよつとだけ払って、部分だけ見て「あ、これは赤人だな」って判断したものもあるんです。なにせ四万点もありますから、一点にかけられる時間はそれほどないです。それも法隆寺の地下室の電気も暗いところで、赤外線テレビにかけて目を悪くしながら、しかも胡粉を払うわけにいかないと思いつながら若干払って読む。だから「赤谷」なのか「赤人」なのかで、読み間違えてもしょうがないなと思つていました。そんな感じで得られた成果は、調査を行った時に作った手書きの資料集をまとめて、法隆寺さんの許可を得て、法隆寺の『昭和資財帳』のなかに活字で収めてもらいました。

私と松村さんとのご縁は、そんな感じなんです。その後、私が先に文化庁に移って、松村さんも後から文化庁に來られて、それで長登の話が出てきて、二人で「この件は、ちゃんとしましょうね」という話をした記憶がある。調査をするために、文化庁の補助金を出すかどうかという時に、松村さんが積極的に対応された結果として、長登の本格調査が始まったと認識しています。

渡辺…奈文研と文化庁の間で異動する人事というのは、本人の意思なんですか？佐藤…違います。私の前には考古学の人が行ったんですが、彼らは四年くらいで奈文研に戻るつもりで行っていたようです。私は日本史系で始めての異動だったので、坪井清足所長から文化庁へ行けって言われた時、岡田英男部長が「四年で奈文研に戻してくれるのか、所長に掛け合ってから行ったほうがいい」と仰るので、所長室に行つて聞いたところ、「所長命令が聞けないのか」つて怒られて、そういう約束はもらえないまま文化庁に移りました。結局、私は

戻れなかったんです。

奈文研から文化庁の記念物課へ行った人は、早く戻りたいと思うことが多い。というのは、研究所は自分の研究が中心ですが、文化庁はお役所仕事をしなくちゃいけない。で、私は「結局、帰れないなあ」とは思つていたけど、運良く非常勤で行かせてもらつていた女子大に呼んでもらつた。その際、上司の狩野久さんのご意向を伺つたところ、「いいよ」つて言ってくれたので、移ることにしました。服部英雄さんと二人で「どっちが先に足抜けするか」みたいな話をしていて、私が先になつた訳です（服部さんは、もう少し後に九州大学に移られます）。

渡辺…佐藤さんは、奈文研に入つて初めて発掘現場に出たんですか。

佐藤…私、実は日本近代史を勉強するつもりで大学に入ったんだけど、一年生の時の少人数ゼミで甘糟健先生という私の考古学の恩師の少人数ゼミを受けて、神奈川県とか東京都とかの古墳の発掘に連れて行っていただいて、新たな関心が湧きました。私は東京生まれなので、自分の足元に古代なんか無いと思つてたのが、自分の足元に古墳があるんだと知つた。関心がグツと遡つて古代史の立場で考古もやりたいなと思うようになったんです。それで日本史学科に進学するときは、古代の井上光貞先生のゼミに入った。ただし、ずっと甘糟先生関係の古墳の発掘（特に神奈川県秦野市にある桜土手古墳群）に入り浸つていて、大学二年生の頃はそこに入り浸りすぎて、春休み、夏休み、秋休み、冬休み、全部そこに行つていた。それで、大学五年生もやる羽目になった。渡辺…井上さんは、そういうのに寛容なんですかね。

佐藤…私の掘っている現場にも、甘糟先生の案内で來られたけれども、むしろ喜んでおられましたね。古代史の人間も発掘もやっていると。先生は、文献の研究者も考古学もやるべきだつていうお考えだつたと思います。この頃、もう国立歴史民俗博物館を作ろうとしておられたから。歴史は歴史・考古・民俗の研究部からなつて、三つの学問を有機的に総合して日本史を明らかにするという方針だから、日本史だけじゃなくて、考古学とか民俗学と一緒に歴史像を構成するべきだつていう考え方でした。



写真20 大切ⅢC区2Tの発掘(1990年)

○ 一九九〇年度の木簡発掘
池田…最初見たところから、佐藤さんは発掘現場に慣れていないなと思っていました。歴代の調査官、いろんな人を見てきたんですけど、佐藤さんと松村さんほど現場に入られた人はいないです。現場にも革靴で入ろうとする人だから、もうドロドロの中へ。「ちょっと待ってください。長靴を持ってきますから」って止めて。ああいう調査官は、それ以来ないです。現場に自ら入ろうとした人はお二人だけです。それが一九九一年頃ですよ。さすがに昔、現場に出ていた人だなんて後から感心しました。
渡辺…先ほど話題になった、木簡がいっぱい出てきたトレンチですが、ああいうのは一度部分的に掘ってしまうと、例えば地下水の水の廻りなんかが変わってしまうって、周囲の保存状況に変化が生じるということはないんですか。
池田…あそこの場合は、逆台形状の谷なんです。それを三分の一ぐらい掘った。底の方は少ししか掘れませんが。地下水もいっぱい出ていたから、大丈夫だと思います。
佐藤…かなり水っぽい所だったし、それを横に切っていないからね。縦にトレンチだったから、周りに大きな影響もなく、まだまだ木簡はいっぱい残っていると思います。

池田…谷の上の方はちょっと薄れている可能性はなきにしもあらずだから、断言は出来ません。地下水は、地表面から1m以下にはある。谷水ですから扇状地形ですから。特にあの発掘した上手の堤の土手の下、あれは完全に生きています。木簡を書いた役所の跡があると想定しています。
【写真20】
あのトレンチの発掘(一九九〇年八月〜九月)は大変でした。地表下5mまで掘り下り、大きな谷であることが分かりましたが、地表下3m位から木片や木簡様木製品・アワビ・栗のイガ・猪の骨・竹製のザルなどが出土して遺物の宝庫であると思いました。九月一二日に松村調査官が来られましたので、思い切った頃ですから、深さ四〜五mのトレンチ掘りは大変な事です。しかし、長登銅山の土層はほとんどが製錬カスのカラミ(鉱滓)の堆積で、カラミ同士が鉄錆で固まり、ツルハシで発掘するといいう硬い層でしたから。土砂崩落は余り考えられませんでした。この時、松村さんから「階段掘りで行ったらどうか、気を付けてやってくださいよ」と了解を得たので、後の調査を大きく前進させる事が出来たのです。拡張した大溝の谷の中心部から大量の木簡、しかも文字史料の残る木簡一五〇点余りが出土しました。この時、拡張出来ていなかったら、この谷(南北大溝②)を掘ることは無かったと思いますし、長登銅山跡から木簡出土などという古代史上の大発見は数十年は遅れていたと思います。実は、一月一〇〜一一日と九



写真21 木簡発掘(左の背は松村、池田、巽) (1990年)

州大学で開催の日本考古学協会大会に参加していました。恩師坂詰秀一先生が来られるということで、立正大考古のOB会が催され、これでやる気が起きたのも事実です。一月十五日、地下水で泥んこの発掘現場で、羽鳥房雄作業員さんが私の後ろで「あれー、何か書いてある。テンペイか」と言う声が聞こえたのです。「またまた冗談を」と覗いてみると、真っ黒い字で「天平四年四月」という文字が見え、これには仰天しました。喜びを分かち合い、誰にも口外をしないことを約して調査はしばらく中断しました。これが大変でしたが、後から話しましょう。

【写真21】

六年後の一九九六年度にも南北大溝②の北側を発掘しましたが、この時、木簡約七〇〇点が出土して、古代銅製錬の実態が分かるようになりました。まだまだ谷の上部(南北大溝南側)には多くの木簡が眠っていると思います。一九九〇年度の調査で、松村調査官が「埋もれた地下の正倉院文書」と比喻されたのは印象的で、早速新聞などに取り上げられました。

○ 調査の予算

渡辺…ところで長登銅山跡の発掘で、予算は文化庁・県・地元自治体と三箇所から出ていたようですが、具体的にはどういう内訳になっているのですか。
池田…まず発掘費用と、その後の保存処理では、予算が別項目です。発掘費用については、平成の初期頃はよく補助金が出ていました。ところが二〇〇五年頃から、県の補助金が少なくなる。
佐藤…発掘調査の費用は、例えば地元の市町村と県が五割を折半して、残りの五割を文化庁が出すという方式が一般的だったんだけど、全国的に県の財政が不如意になって、県の出す割合が二〇%となり、最近ではゼロというところも出てきた。県の予算がないから、地元市町村が前は二五%でよかったのが、それが増えて県の予算ない分は地元で出すということになっています。
池田…長登で発掘調査が行われたのは、一九八九年から二〇〇二、三年頃です。この時期は、よく補助金が出ていたと思います。一方、木簡の保存処理については一九九九年から四年間ぐらいかけて、約二〇〇点を処理しました。

○ 一九九一年木簡発掘と採
跡の確認

佐藤…ところで、私は一九八九年四月に文化庁から私立の女子大に異動するんですけど、一九九一年二月、初めて山口駅から池田善文さんに車に乗せてもらって、五〇分ぐらい飛ばして、大田の長登の地を車で案内していただきました。私は当時出張するときは、山川出版社の何々県の歴史(旧版)を持って行っていたんですけど、当時あれを見ても、大田のあたりについては大田・絵堂合戦のことが書いていなんです。そういう場所で、新たに長登銅山というすごい遺跡が見つかったということは大きいと思います。

【写真22】

現場について、池田さんの掘られた小さなトレンチを見ましたが、ここ一箇所から、最初だけで一五〇点も木簡が出た。私が入れたら、トレンチの壁に木簡が出てくるんですよ。生々しかった。



写真23 館野先生来山(左から森田孝一、館野和己、池田、神田高広：現文化財保護課長)(1997年)



写真22 大切ⅢC区2T(左から井上信正、八木、池田、佐藤、白井主事)(1991年)

池田…あの頃、一九九〇年一〜二月に、どんどん木簡が出ていました。九一年二月もまだ出ていました。次から次とですね。この二〜三月は、直木孝次郎さんも来たし、佐藤さんも含め、いろんな人が来られて大変でしたよ。渡辺…来てもらうと、ありがたいこともあるんですけど、そこまで来ると大変ですね。

池田…いやいや、いろいろ教えてもらいたい。田舎の小さな自治体ですから、そのエリアしか行動範囲がないじゃないですか。やっぱり国内のトップレベルの人たちと、顔合わせというのはありがたい。こっちからお金を出して指導員として来てもらわないといけないような方々が、向こうの自腹で来てくれるんですから。あの遺跡のおかげで、いい体験をさせてもらったなと思っています。

【写真23】・【写真24】



写真24 森浩一先生来山(1988年)

佐藤…長登は全国区の史跡ですからね。文化庁の史跡の指定基準は、「我が国の歴史を正しく理解する上で欠くことのできない遺跡、これを史跡に指定する」となっている。我が国の歴史を、日本史を正しく理解する上で、その遺跡がなくなったら分からなくなっちゃうよっていう遺跡が史跡になるっていう原則です。そういう意味から言っても、それにふさわしい遺跡でしょう。

渡辺…たしかに長登銅山跡も今となっては有名な遺跡ですが、そもそも鉾山遺跡が市民権を得たのは、つい最近ですよ。

池田…ええ、早い時期には「地方史」の域を出ない扱いでしょう。鉾山が「遺跡」なんていうイメージは、昔はないです。最近まで稼働していた銅山も多いですし、この頃はまだ四分の一ぐらいは稼働していましたからね。また近代の状況も記憶に残っているし、閉山になったらなくて、山深いところですから開発の触手が届くわけでもない。考古学的な興味からも、全然遠ざかっています。

鉾山史というのは、主に絵図面・古文書が研究対象で、近世期中心に小葉田淳さんなんかで完成させたイメージがありましたから、あまり考古学で研究する対象という感覚はなかったんです。

佐藤…そういう意味でも、長登は初めての古代の鉾山ですよ。

池田…そうですね。NHKの毛利和雄さんの助言もあって、美東町が発起人となって徳地町・小郡町・宮城県の涌谷町などで「東大寺サミット」の実現に尽力しましたが、一九九一年一〇月に開催の運びとなり、全国一四市町村が奈良に集合しましたが、その折、第一回シンポジウム「大仏さんをつくる」が開催されたのですが、宮城県教育委員会の桑原滋郎さん(黄金山神社の産金)と、檀原考古学研究所の中井一夫さん(東大寺大仏殿回廊西遺跡)と私が長登銅山というラインナップで発表をした時、司会を田中琢さん(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長)が引受けられたのですが、その時、田中さんから「鉾山を掘る、その鉾山を発掘調査している山口県の池田さんです」と紹介されました。こういう紹介を受けて、当時の学界ではまだ鉾山を発掘・調査するというイメージがないんだと、再認識しました。東大寺大仏殿回廊西隣の発掘を契機に、注目され始めたというのが、この頃の状況です。

【写真25】



写真25 シンポジウム「大仏さんをつくる」(1991年)

渡辺…たしかに、私が若い頃に一般書を読んでいた感じでも、中世後期以降の佐渡金山とか、石見銀山とかいうのは紹介されていたけれど、それ以前は日本に鉾山なんかはない、という雰囲気の説明でしたからね。

佐藤…そうは言っても、まったく学界で注目されていなかったという訳ではなく、長登銅山よりも前に、たとえば黄金山産金遺跡は史跡に指定されています。

よ（一九六七年）。

池田…それは、そうですね。

渡辺…黄金山では、今でも金が出るんですか。

佐藤…ここには黄金沢という沢があつて、その沢から砂金が出るそうです。東北大の伊東信雄先生が、黄金山神社のお堂のあるところを発掘したら、六角形の仏堂が検出されて、そこから「天平」と銘書きした瓦が出土して、これが天平産金を記念して立てた仏堂だろうということになって、史跡に指定されました。

渡辺…この種の鉱山・鉱脈の発見記事は、六国史でも時々出てきます。ただ私のイメージですと、何かの鉱物が出る場所があつても、すべてを正直に中央政府へ申告はせず、自前で細々と掘り続けている場合も少なくなかつたように思うんですが。そこらへんは、どうでしょうか。

池田…ただね、地質学的な特徴からすると、長登銅山のような接触鉱床、つまりマグマが大がかりに吹き上げてきて形成された事例の場合は、銅なんかの色目も目立って、人目に付きやすい（これは中国やイスラエルの鉱山の場合も同じです）。石灰岩との接触で鉱物ができる場合、白い石の表面にサビの緑が付いていると、これは目立つ。一方、地下から熱水と一緒に上がってくる熱水鉱床の場合は、それほど目立たないので、探しにくいという感覚があります。ですから、そういう鉱床が見つかるのは、平安時代の九世紀以降になります。佐藤…長登銅山はそういう環境だったので、見つけやすかつたということですね。

渡辺…いま、池田さんの知識・経験があつたら、古代の山の中を巡り歩いて、新しい銅山を見付けたりする自信はありますか。そこに生えている植物で、ある程度は判断できるといふ話も聞いたことがありますね。

佐藤…人によつては、匂いでわかるという話もありますよね。

池田…植物というと、ヘビノネコザという鉱山特有のシダがあります。あとは、ミヨウガが生えている場所は、昔そこで人が生活していたと分かる。ミヨウガは、動植物が運びませんから。それと、ウルシとか山椒がバアツと生えているところは、古代に何かあつたかもしれない。ただね、鉱山を見つめる自信はな

いですよ。毎日毎日、岩の割れ目を探して半年ぐらい歩き続ければ見つかるかもしれません。

佐藤…私が伺つた話だと、池田さんが若い頃、探検の装備をして長登の坑道に一人で入つていって、須恵器の欠片が落ちていたのを見つけたということでした。

池田…いえ、最初に見付けたのは山口大の竹田君です。山口大学に洞窟研究会というのがあつて、鍾乳洞なんかを探検するんです。一九九一年に彼らに頼んで坑内の測量調査してもらつたら、「茶碗のカケラがありましたよ」って持つてきて、見たら八世紀頃の須恵器だつた。その後に、松村さん・巽淳一郎さん・小池伸彦さんなどと一緒に、私も鍾乳洞の坑道に入りました。そうすると、学生が拾つてきた須恵器片とぴつたり合うやつが、落ちていたんです。これは奇遇でしたね。

【写真26】

佐藤…それは、面白い話ですね。

渡辺…それより前に、周辺で須恵器を拾つたといふ話もありましたね。一九七二年に須恵器を採取した地点は、どこあたりですか。

○ 一九七二年、古代長登銅山跡の発見

池田…今の大切西です。最初行つて谷頭、谷の奥詰めです。耕地と森林のちょうど境目ですね。今、プレハブが建っているあたりです。当時、私は福岡県教育委員会にも入れたんですが、親父が病気ということで、考古学をやるのは半ばあきらめて美東に帰つてきました。美東なんて山の中ですから、それまで専



写真26 榎ヶ葉山露天掘①号(前列左から藏重、竹元、白井、池田。後列左から小池、巽、山大生、松村) (1991年)

門にやっていた弥生土器もない、遺跡もあんまりないんです。

ところが帰ってきて半年目、ちょうど『美東町史』編纂中で、調査員の人が元美東中の阿武孝太郎校長だったり、私が採用された時に退職された吉永保義さんという人だったり、関係のあるお二人が、長登のある人から茶碗のカケラをもらって帰られまして、「池田君、こんなのがあったよ。あなたは考古学だから分かるか」って見せてもらって、「これは奈良時代のものじゃないか」と思っただけです。その人達もどこから出たか場所は知らないで、地主さん（難波健作）のところに行つて教えてもらった。そういう感じで、長登の調査は始まったんです。

ですが、当時まだ私も役場に入ったばかりで、青年団とかいろいろな活動もありまして、あんまり調査には集中できなかった。それに、遺跡はまず測量して、ちゃんとした地形図を作つて、それから発掘するんだっていうのは、大学で徹底的に教えられていましたから、その地形図を作るのに、三年かかりました。賃金も何も予算がないので、美東中学校のクラブ活動（地理の岡山龍夫先生が顧問）の協力で、春夏秋冬休みにやるしかなかったからです。その後、最初に掘つたのは一九七五年暮れで一m×二mの小さいトレンチですけど、とても深いので一・五mくらいから水が湧いきて、残念ながらそれ以上は掘れなかつた。

【写真27】

そういううちに、一九七七年夏に葉賀七三男という、通産省を定年で辞めて、当時は日本鉱業会の調査役として全国の鉱山跡の調査をしている人が訪ねてきた。この人は、本気でした。葉賀先生は、長野県の伊那谷の考古学ボーイなんです。戦後、通産省に入られたけど、趣味で考古学をやられていたん



写真27 大切な発掘(1975年)

です。長登から須恵器が出たという私の小さい地方紙の報告を友人から紹介されたとかで訪ねてこられた。この方が、カラミを科学分析しようと提案されたんです。その頃から、そういう雰囲気が出てきました。一九七七年のことです。分析された久野先生も葉賀先生と仲が良く、奈良の東大寺の発掘をする前にすでに長登銅山のカラミも分析されていました。それで、東大寺から出たカラミと比較して、同じだという感触を受けられたと思います。あれが違う人だったら、そんなことを直感的に言わなかったでしょう。成分データが完全に一致したわけじゃないですから。長登には奈良時代の須恵器があるということが一つと、砒素と銀が多いことに注目されたのは卓見でしょう。決して、厳密な意味での研究結果ではないですよ。そういう経緯で、それまでは、田舎の地方の小さな小さな遺跡に過ぎなかった長登銅山の名前が、いよいよ全国レベルで知られるようになっていったのです。

○ 一九八一年、山口県鉱山遺跡分布調査

渡辺…この頃、池田さんは山口県全般を対象とする鉱山遺跡の調査にも携わつたそうです。池田・山口県が葉賀先生の指導で、県下の鉱山の分布調査をやったんです。山口県の次に、兵庫県もやりました。山口県を担当したのが、県教育委員会の渡辺一雄（後に梅光学院大学副学長）さんです。私は美東町担当で、約二五カ所の鉱山跡と、数えてみたら一〇〇位の穴に入っています。それに入つたおかげで、その坑道が昭和のものか近世のものかなどということが、感覚的に体感できるようになりました。この調査がなかったら、私も体感できなかったんでしょうね。そういう経験を持って、長登の鍾乳



写真28 山口県地方史学会で大会発表(1985年)

洞を利用した坑道に入ると、これは古代としか考えられないという感覚でした。長登銅山は、すでに小林行雄『古代の技術』（塙書房、一九六二年）で言及されたりしていましたし、史料にも長門国採銅所のことなどが出てきたりもしたもので、山口県地方史学会でそういう論文を発表して、それが注目されたかなという感じですか。その頃から、この地に銅の採掘・製錬を担当する役所があったんじゃないかなと考え始めました。

【写真28】

渡辺…調査の期間はどれぐらいでしたか。

池田…一月から三月までです。

渡辺…その期間は、ほとんどこの調査ばかりやっていたんですか。

池田…二日に一遍は行っておりました。それぞれの坑道には、だいたい地元の人と一緒にいくんですが、その人が都合悪いこともあるので、一回教えてもらった後は、自分一人でも入ることも多かったです。中に入る際は、懐中電灯を忘れることもあって、そういう時はガスライターの明かりで入るんです。

ある坑道に入る際、最初は明かりはガスライターでいいかと思って入ったのですが、炎の大きさが倍になってなんか臭いんですね。で、慌てて外に出て、そのまま気を失っていました。二時頃に入ったと思うんですが、目が覚めて時計を見たら四時頃になっていた。危なかった。坑道の入り口で倒れたからどうにかになった。何かのガスが溜まっていたんですね。下手したら、あのまま行方不明ですよ。あんなところ、誰も入る人もいませんし。なぜそんなことになるかというところ、近世・近代の鉱山は、空気抜きを兼ねて平行に二本の坑道を掘って、自然通風させるんです。ただずつと放置されて、今ではそれが詰まっていたんですね。そんな事があってからは、坑道に入るのが恐ろしくなりました。ただ、長登銅山は違いますよ。石灰岩台地ですから鍾乳洞とか岩の割れ目が多く、どこかに繋がっているんですね。山の中が蟻の巣状になっているので、酸欠は無いんですね。

渡辺…大変な目に遭いながら培った経験ですが、この種の感覚というのは、現場で経験を積み重ねないと身につかないですよ。だから言葉で説明することはできないし、次の人に教えることもできない。今の若い人って、そういう経験の蓄積の仕方って泥臭いと思ってるのかな。文献史学でも史料現物を見よ

うとしない、その必要も感じていないようで、なかなか難しい状況です。

佐藤…奈文研にいた頃に、法隆寺の調査へ行っても、誰も調査方法なんて教えてくれないです。先輩がどうやっているかを横で見ながら、その調査方法を盗むだけなんです。たとえば中世の無年号文書でも、奈文研の調査には、鎌倉の前期・中期・後期、室町の前期・中期・後期、江戸の前期・中期・後期の判断を書く欄があった。大学では、そういうことは本格的に習っていないし、実物の古文書を見る機会も少なかったから、初めてそこで紙の質だとか、筆の雰囲気だとか見ながら、全体で鎌倉後期だというような判断をする。先輩がやった既存の調査で分かっているものを並べて見ると、これとこれの間かなとか判断できる。その後、先輩のところを持って行って、小さい声で「これ鎌倉時代中期でいいでしょうか」と聞いて、「うん、いいんじゃないの」とか言われたら、よかったなと思う。そういう風に、盗んで学ぶっていう、見て学ぶんですよ。ところが今の学生は、「マニュアルを見せてくれ」、「どうして、これが鎌倉の中期なのか教えてくれ」みたいなことを、ズバツと言ってくる。なかなか言えないです。紙の質一つとったって、文字情報ではなかなか伝えられない。渡辺…あの種の年代比定は、前後の一段階くらいのズレは許容範囲でしよう。とりあえず鎌倉中期と認定しても、実際には前期か後期の可能性もありうる。それぐらいの誤差は、許容範囲ですよ。

佐藤…私は今でも、鎌倉前期・中期・後期っていうのを、必要がある場合には書いていますが、たとえば鎌倉前期の始まりが一八五五年と、奈文研では田中稔さん以来決めてあるんだけど、じゃあ一八四四年と八五五年でどう違うのって言われても、そんなの分からない。でも奈文研の調査ではこれを書くようにして、『東大寺文書目録』でも明記しています。場合によったら、深く研究したら違っていてもあるかもしれないけれど。

渡辺…まあ、そんなに外れてはいないでしょう。二段階もズレることは少ないはずですよ。

佐藤…そういう自信はあります。それと、あれは後の人の道しるべという意味もある。単に無年号文書だったら、近世文書だろうと見向きもされない可能性がある。それを紙質や筆跡から絶対に近世文書ではないというものに、たとえば「鎌倉前期」という所見を付けておけば、後世の若い研究者が「これ鎌倉時

代なんだったら、ちょっと調べてみようか」って思ってくれて、よく研究したら鎌倉中期だつて分かったりする場合もあると思うんです。
 渡辺…池田さんの分野でも、たとえば「古墳中期」とあつたつて、前後一段階くらいのズレはあり得るでしょう。
 池田…勿論そうです。ただ編年も色々な説が並立していて、難しい。
 渡辺…同じ県内でも、自治体毎にこれだけ違うんだから、どうしようもないですね。

○ 東大寺大仏殿境内の発掘調査の報道以後

渡辺…ところで東大寺境内の発掘の結果、美祿では大騒ぎになったわけですが、その際、何か苦労はありましたか。発掘に反対する人がいて説得したとか。
 池田…いや、それはなかったですね。美東町は一九八七年頃から地方交付金が相当減つてしまつて、もうにっちもさっちもいかない状態でした。私はその頃、組合の副委員長や委員長をしていたんですが、やむを得ず役場職員の昇給を三ヶ月ほど延伸したり、給料を一号ダウンしたこともあります。隣の自治体や県に行けば給料が高いのに、涙を呑んで。でもまあ、しょうがない。そういう時代でしたから。そんな中、長登銅山が東大寺と関係あるというのは、大ニュースでした。観光的なものが作れるつて、なつてきたわけですよ。美東町には観光地として大正洞・景清洞があるけれども、隣の秋芳町の秋芳洞と比べると一割しか収入がない。そういうジレンマもあつて、長登銅山への期待はすごかったです。
 渡辺…この際の町の対応として、開発か調査かという話がありましたか、何か開発が予定されていたんですか

【写真29】



写真29 松野町長の視察(1988年)

池田…まあ、別に強いてこれというのはないです。大仏を建てようっていう声があつたり、今後はほとんど人が来るからそれへの対応をとかいう話はありませんが。山深いところですから、ケーブルカーなんか作るのも大変ですし、そういう計画はないです。それで、当面は調査を進めましょうという話になった。
 渡辺…この後、文化庁から補助が出て調査・研究が進んでいくわけですが、最初に計画を打ち出したのは地元側ですか。

池田…試掘調査は、当時の松野栄治美東町長が上程して、美東町議会が承認するという形で予算が付ききました。八月に試掘して、例の「大家」と書かれた墨書土器が出ます。それで、ここには古代の役所がある可能性が高いつつて、国も動き出しました。文化庁の松村さんなどのご尽力で、ドーンと補助金が五〇〇万円つきました。試掘の段階では、トレンチは面積も狭いし、作業員の賃金だけですみますが、これから本格的に半年間掘るとなると、一日二〇人ぐらい人を月に一五日ぐらいは雇いますから、結構費用がかかります。美東町も国も、よくお金を出してくれたと思っています。

こうなると美東町だけで調査するのは大変だということで、県に調査員の派遣をお願いしたけれども、県もあの頃は緊急調査が多くて、とても人材派遣はできないと断られました。そもそも、鉱山なんて掘つた経験ある人もいないし。「池田しかおらんから」と言われた。山口県埋蔵文化財センターの中村徹也次長の紹介で、奈良大学の水野正好さんのところに行つて、学生を一人派遣してもらいました(この人は、いま宮内庁にいます清喜祐二君)。その一九九〇年秋に木簡が出て、九一年に保存処理をする際、「赤外線カメラがあると奈良まで行かなくて済む」つて松野町長に言つたら、町長が「じゃあ買えばいい」つて、一五〇万円のカメラの予算がポンツと付ききました。

【図2】

佐藤…へえ。良かったですね。

渡辺…当時の町の財政規模はどれぐらいだったんですか。

池田…年間の予算は、四〇億円もなかったんじゃないですかね。僕は税務課時代に、町財政の深刻な状況を踏まえて税の滞納を厳しく取り立てていましたし、町長はそういう状況を見ていたから「池田君は無理な予算要求はしない。赤外線カメラくらい買ってやれや」つて、そんな感じでした。このカメラは、その

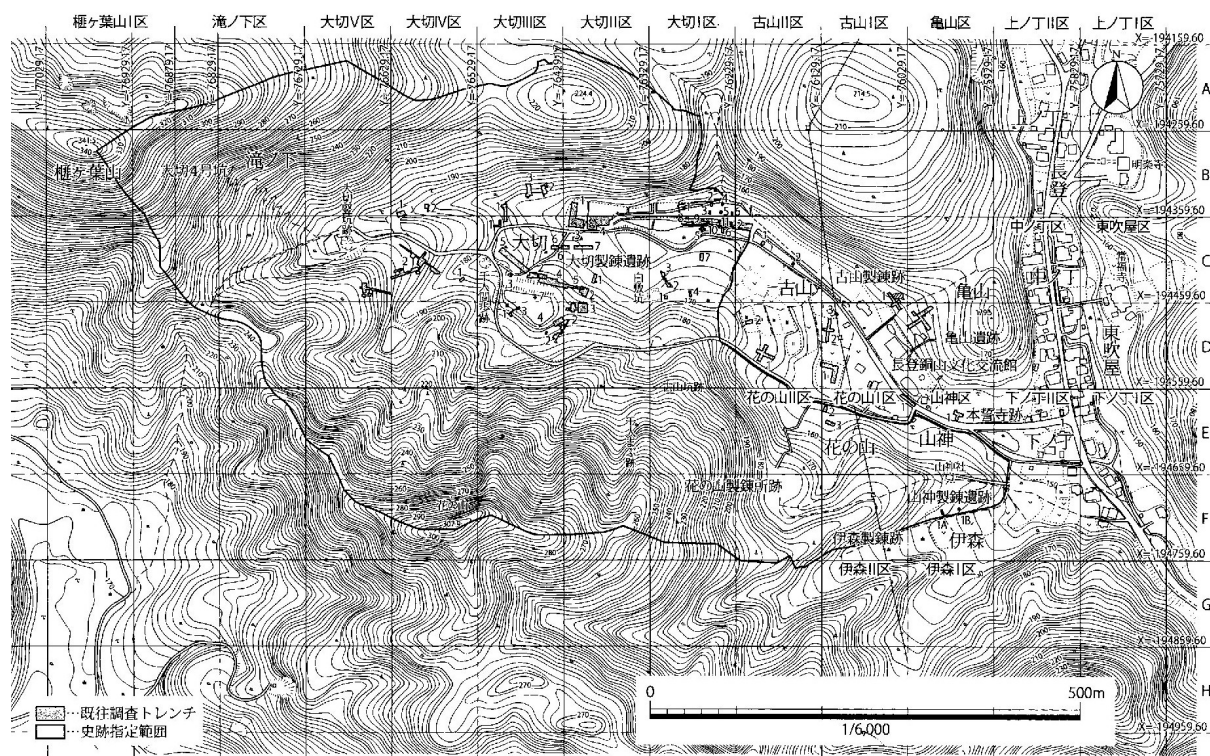


図2 長登銅山発掘調査区割図

池田…平原第Ⅱ遺跡の発掘は、一九九四年のことですから、松村さんがまだ文化庁にいた頃です。当時は圃場整備が各地で行われていた頃で、県教委が対応するのは余程の遺跡でない、と難しい状況でした。ただこの遺跡は、前の年に僕らが試掘して、緑釉陶器とカラミが出ていたんです。だから、重要な遺跡だと県教委に報告したんですが、「あそこは発掘しない。工事して何か出てきたら止めて見る」という計画でした。それじゃ絶対ダメだと思っただんです。その頃、まだ県教委におられた渡辺一雄さんも心配されて、文化



写真30 平原第Ⅱ遺跡の航空写真(1996年)

後、周りの自治体も含めて、大活躍します。あっちこちから、「うちにも持ってきて」「やってくれ」という要望が結構ありました。佐藤先生たちにもあれで木簡を見てもらって、いろいろと検討してもらいました。佐藤…はいはい、やりましたね。渡辺…発掘現場に色々な人が来るようになるのも、この頃からですね。池田…ええ、次から次へと。まあ、鉱山の調査なんて、今までないですから、みなさん、珍しい・新しいと感ぜられたんでしょう。マスコミも、二〇〇〇年の旧石器捏造事件までは早くスクープしたいって、現場に張り付いているような時代でした。あの頃は、頻繁に発掘のニュースがTV・新聞で流れていて、長登銅山跡はしょっちゅう報道されていました。やっぱり報道されると、みんなが見る。だから、市民の関心も高かったです。○ 一九九四年 平原第Ⅱ遺跡の発掘調査 渡辺…ところで長登銅山とやらんで、この地域の古代における銅製錬技術を考える際に重要な平原第Ⅱ遺跡も池田さんが発掘されていますね。

庁の松村さんと相談してくれて、長登銅山に付いた国庫補助金の重要遺跡確認緊急調査費の一部を使って、この遺跡を掘れることになったんです。そうしたら緑釉陶器がたくさん出て、九世紀後半以降の長大な建物も出た。鉛製錬所の跡が廂のなかに点々と検出されて、鉛工房だったことも分かった。本当に、掘ってよかったです。

【写真30】

佐藤…胡粉の製造というのは、貝を使うんじゃないですか。
池田…古代の胡粉の原料は鉛で、貝は中世からです。

渡辺…貝を原料とする白色顔料にシフトするのは室町頃からというのが、絵画研究の分野では言われています。

池田…この遺跡の発掘の際、鉛が一杯くっついた甕が出てきたんです。中国の『天工開物』（一七世紀）に、甕に酢と鉛を入れて熱すると胡粉ができると書いてある。炭酸鉛が生成するんです。その胡粉を六〇〇度ぐらいの火で焼くと、いわゆる丹（赤橙色）になるんですよ。『延喜式』でも、長門の調は胡粉・緑青・丹の三種類です。他の国にはないです。独特なんだなって思います。

佐藤…胡粉は白粉の顔料になるんですよ。それを建物の白壁に塗った建物の実例があれば、面白いですね。たとえば高崎市の上野国分尼寺の尼坊を掘った時に、尼坊の床と壁土が出てきて分かったんですが、表面が真っ白なんです。その白が本当に大理石みたいな輝くような白で、すごいなと、僧坊ではそんなことしないだろうなと思いました。

池田…正倉院の伎楽面を正倉院事務所の成瀬正和さんたちが成分分析したんですが、長門銘が入った面は中世の修復で、貝殻胡粉を上塗りしていて、古代から貝殻胡粉があったという誤解を解きました。ああいう調査を積み重ねていくと、いろいろ分かってくると思います。

佐藤…緑青といえば、私が一番最初に池田さんに狸掘りの坑道に連れてっていただいた時、もうゴロゴロと岩に緑青がついているんですよ。まだ国指定よりも前の時だけど、池田さんが「これ持って帰っていいですよ」って仰るから、遠慮しながら、ちっちゃいやつを持って帰りました。今でも、私の部屋の本箱の棚に大切に置いてあります。これは、長登の緑青の付いた小さな岩だと思って、池田…そうですか。あの頃、みんな、ちっちゃいのを持ち帰っています。それで、

あの時の石をまだ持っていますよって、東大寺の管長さん達もよく言われますね。まあ、そういう経緯のなかで、この遺跡に顔料の生産部門があるのかなと考え始めた。今、その整理をやっています。来年、報告書を刊行する予定です。佐藤…緑青は、江戸時代でも日本画で一番いい緑色を出せるのは長登産のものですよ。

池田…はい、「滝ノ下の緑青」です。

渡辺…例えば胡粉とか、緑青とか、蛍光X線をかけたら産地ごとの特色が出てくるんですか。

池田…いや、その産地をまだ特定できていない状況です。平原第Ⅱ遺跡は第Ⅰ候補ですが、あとは多田銀山（撰津）に一二世紀後半ぐらいから採銅所ができて、緑青は伊勢神宮などにあそこらから供給しています。長登は、もうその頃は稼働していません。でも多田も一二世紀末〜一三世紀中頃までで終わってしまうんです。それ以降、ずっと銅産業はシャットアウト。だから顔料の生産地は、まだ特定できてないのが現状です。

佐藤…日本には結構古い時代の絵画が残っているから、美術史の分野でそういうのを体系的に非破壊的に分析できれば、いろいろ分かってくるでしょうね。

渡辺…製造プロセスではなくて、産地ごとに特定の数値が出るんですか。

池田…胡粉などは簡単に出るはずですよ。鉛同位体をちゃんと計測すれば、正確に出てくると思います。まだ顔料の研究分野にまで、鉛同位体比に注目した研究方法は本格的に持ち込まれていませんが、これから有望な研究テーマだと思います。

佐藤…多分、高松塚古墳の壁画については、たとえば東京文化財研究所などの保存科学の分野の方で、顔料の非破壊分析がなされていると思いますよ。

池田…そうですね。でも我々は、そのデータにはアクセスできない現状です。

渡辺…おそらく、保存科学の人たちは、池田さんが言うような方向で分析ができると思っていないから、いままですべてアプローチしてこなかったんでしょうね。

池田…非破壊法による分析では、あまり精密な数値は出ないんです。だから冶金関係の研究者も余り重視しない傾向があります。でも僕ら考古学者からすると、その程度の大まかなデータで、十分なんです。Pb（鉛）が多いか少ないか、それが分かればよくて、〇・〇〇%の桁までのデータなんて要らないんですよ。

この手の感覚が理系の人と違うんです。

渡辺…平原第Ⅱ遺跡について、顔料以外で注目すべきことはありませんか。
池田…平原で出た緑釉陶器は、他の産地のものより低い温度で焼いたようです。今度、再現実験をやってみようと思っています。萩焼の作家が、すぐ近所に住んでいますから、ろくろで挽いてもらって。わたしは、これが『延喜式』にも出てくる長門の盗器じゃないかと思っています。猿投とかの緑釉といわれるものと比べると、胎土が柔らかいんです。四〇〇度か五〇〇度以下の低い温度で焼いたからだと思います。よくこんなものを都の貴族が使ったなどといううな。その代わり、緑がきれいな緑です。

【写真31】

佐藤…見た目を重視したんでしょうね。

池田…こういう事を考えると、平安時代の採銅所というのは、平原に置かれていた可能性があります。二間×九間の建物跡、これは「西」という墨書が出たから西の建物なんです。ということは、同じような建物が、おそらく東にもある。四年前に周防鑄銭司で二間×一〇間の大きな建物跡が出ましたから、山口県一の建物跡じゃなくなりましたけど。まあ、そういう面白い遺跡です。

渡辺…そういう貴重な遺跡が、場合によっては発掘できないまま消えてしまった可能性もある訳ですね。

池田…これも松村恵司さんとか渡辺一雄さんとか、理解者が居られたから発掘



写真31 平原第Ⅱ遺跡出土遺物(緑釉陶器、鉛インゴット、坩堝)

することができたと思っています。そういう人脈のおかげです。

佐藤…池田さんを含めて、人を得たということですよ。単に遺跡があっても、それを生かすためのネットワークがないと。ネットワークも自然にできるんじゃないわけでしょう。

渡辺…それは、ある程度、事前に構築されてないと、いざという時は役に立たないわけでしょう。

池田…やはり普段のつきあいとか、いろんな交流関係がいろんなことにも影響するということですね。

佐藤…大事なものが出ましたって、急に文化庁に行っても、なかなかすぐに対応してもらえなかったり、予算は来年度になるよってなると、もう時宜を逸してしまう。この遺跡の場合、そういう条件がうまく整っていたんですね。

渡辺…私の世代から見ると、遺跡が見つかるという事件も含め、佐藤さんや池田さんの時代の方が、面白いことが一杯起こっていますよ。リアルタイムに、目の前で見つかった時のインパクトって違いますから。

佐藤…ああ、確かに。

池田…こんな展開の末に、美祿郡一帯が古代の鉱業技術の中心的な場所だというイメージが定着してきたんです。

渡辺…鉱山があるっていうところを起点にして、中央政府が持っているさまざまな技術がこの地域に注ぎ込まれていくっていうことですね。

池田…ずっと前から渡来系の人たちがいたかもしれませんが、長登銅山が本格稼働するに当たっては、中央から知識人がやってきて、色々と指導したのだと思っています。

○ 一九九六年度の木簡大量出土

渡辺…ところで発掘していて、現場で困ったことかありますか。

池田…現場は、とにかく水がいつも湧いて出るところでしたから、長靴で入って泥んこ試合ですよ。谷の堆積物が泥んこで、いつも水が湧いて湿っていて、土層がはっきり見極められないのも問題でした。ただ途中、第三五層という赤い層があつて、これを基準にして判断していました。

佐藤…カラミの層の中にも、そういうのがあるんですね。

池田…これは、炬を壊した時の残土でできた層です。
佐藤…この層の上か下かで、時期の判断をされたんだ。

【写真32】



写真32 木簡「美祢郡司」出土状況(1996年)

渡辺…地山まで何層あるんですか。

池田…谷ですから、投げ込みとかほとんど人為的な地層です。場所によっても違うし、どこでも何十層もあります。そういう場所に設定したトレンチですから、四m幅の向こうとこっちを合わせようなんて、なかなかできない。『長登銅山跡Ⅴ』(二〇二四年)では苦労しましたけど、なんとか奈良・平安・中世・江戸くらいの土層は分別できました。

渡辺…この区別は、最終的にはどう判断したんですか。

池田…現地で見ただけでは難しいです。土層のレベル(標高)を記録し、遺物の堆積の仕方とか断面を採って、総合的に三次元復元で判断しました。

○ 最初の木簡出土と保存処理

渡辺…この頃から、木簡がたくさん出てくるわけですが、そこらへんのことを。

池田…一九九〇年晩秋、木簡が最初に出てきた時、「すぐにタッパーに入れろ」って、寺崎保広(奈良国立文化財研究所)さんに言われました。実測図を書く暇もないので、ちょっと紙を切って貼って、それで済ませる。八木先生が来る前は、巽先生と寺崎先生から、そういう木簡の発掘の方法を教わりました。
佐藤…木簡が出た当初、水漬けとはいえ、置き場所も含めて数百点も保存しておくのは大変だったんじゃないですか。

池田…ですね。ただ四酢酸が効きましてね。あれで、当時教育委員会事務所が美東センターにあり、その二階の結婚式場に暗幕があり、木簡保存には絶好の場所でしたから、そこを借り切って、ブルーシートを敷き詰め、コンテナやタッパーに水と四酢酸の溶液に木簡を入れて、蛍光灯スタンドで八木先生と文字の有無を確認しましたね。そうすると木簡から銅イオン(カラミ)から排出した銅イオンが木質に染みこんでいる(が)が排出してタッパーの水が緑色になっているんです。銅イオンが木質の腐食を防御していたんです。このころ、木下尚子先生の計らいで、梅光女学院大学の学生達をアルバイトで雇い、楽しい作業であったのを思い出しますが、佐藤先生もこのころお見えになったんです。

佐藤…ああ。奈文研でも、それ以前はホルマリンを使ってたから大変だったんです。ホルマリンは水換え作業を担当すると、指紋がなくなるわ、悪夢を見るわ、ひどいモノです。ホウ酸の水溶液に変わって、そういう問題が全然なくなった。

池田…佐藤先生にお伺いしたいんですが、長登の斜面に廃棄されていた木簡は、豊前門司・家原殿などと書かれた木簡が径一mぐらいの範囲からまとまって出てきました。それと違うところから、長門の椽に宛てた大型木簡と、駄馬十頭の本簡が重なって出てきた。同じ時期に別々に廃棄された木簡ですよ。上流から流れてきたとか、そういう風には考えなくていいですよ。

佐藤…カラミの層は厳密には分層できるのかもしれないけれど、あそこの遺物は一遍に流れ込んでますよね。

池田…粘板層があるだけです。

佐藤…年代が大きく違うかというのと、そんなことはね。同じ天平の頃のものかなど。

池田…あの場所は飛鳥池みたいに溜池があって、水がすこし溜まっていた場所なのかもしれないです。もっと広い範囲を掘ってみないと、断定はできませんが。

佐藤…あそこにカラミを捨てていくと、どんどん地盤面が上がっていきますよね。一杯になったら、その後はどこに捨てるのかという問題があるけれども、まあ谷地形で水分があるから木簡が残ったんでしょね。

渡辺…保存処理するまでは、水にブカブカ浮かせていたんですね。

池田…ええ。ただ長登木簡の場合は、四酢酸を入れると木から銅イオンが排出されて緑色の水になるので、非常に保存状態がよかった(二〇年保ってきた)。

三年前に『長登銅山跡Ⅴ』の報告書を作るという際、奈文研のご指導で、全部水を変えて水道水とホウ酸にしたんです。それで去年、木簡を見たら状態がよくない。銅イオンが入っていた時の方が良かった。

佐藤…水道水に代えたことで、逆に水替えを恒常的にしないといけなくなりましたね。ただ文字を読むとき金属イオンは色が暗くなってしまっているので、四酢酸みたいな薬品で、漂白する必要がある。そうして金属イオンを剥がしてから読むんですけど、その後、また元の銅イオン水の中に戻せばよかったですね。渡辺…この遺跡からは木簡が大量に出てきましたが、保存処理が済むまでどのくらいの時間が掛かったんですか。

池田…一九九八年までに八二七点が出ました。ただ、このなかには今であれば、文字がないから木簡様木製品に分類するようなモノも含まれています。墨痕があるのが二四〇点くらい、そのうち文字が読めるのが二一〇点くらいです。その文字が読める分が県指定になって、保存処理をしました。処理には一九九〇〜二〇〇一年まで掛かりました。その前に、奈文研が五〇本ぐらいやってくれましたから、足かけ四〜五年は掛かっていますね。この頃、私は社会教育課長になっていて、余り現場には出られなかったんで、保存処理は森田孝一君当時、美東町教育委員会文化財保護(主事)が中心となって臨時職員と共に行ってました。

渡辺…装置が空いてないから時間が掛かったのか、それとも予算処置の問題ですか。

池田…予算の関係です。処理の方法は、最初は真空凍結乾燥、後半は高級アルコール法にしました。

渡辺…それぞれの方法について、簡単に説明をお願いしますか。

佐藤…出土した時の木簡は、水分一二〇%くらいで出てくる。ほぼ水分だけだから、普通のところを置いておいて水分が蒸発したら、SF_Xの映画じゃないけど、形がなくなっちゃう。それで水に代わる溶剤を染みこませるんです。急激に代えようとダメだから、最初は三〇%くらい溶剤に漬けて、五〇%・七〇%・一〇〇%と濃くしていく。その後、マイナス一八〇度くらいで乾燥させる。そうすると、地表に出しても中に溶剤が入っているから形は崩れないというのが、真空凍結乾燥です。一方、高級アルコール法というのは、アルコールエンテルの中に浸けたうえで乾燥させる方法です。

池田…長登の木簡の場合は、木のなかに銅イオンが入っているので、実はそのままでも劣化しないんです。実際に、文字のない木簡なんかは自然乾燥したのがあります。それでも、結構状態がいいんです。槍鉋の削り屑とか、手斧の削り屑とかいっばい出ていますから、それは自然乾燥のまま何もしないで長登銅山文化交流館に展示してあります。表面にちよっと薄い緑色がちよっと浮き出ているのもありますけど、変形は全然していません。私が交流館の館長時代は、もっぱら銅イオンの殺菌効果を来館者に宣伝していました。例えばお墓

の花筒に銅錆を入れておくとか長持ちするとか、日本銅センターの資料を拝借してね。

佐藤…真水に入れると、文字が薄れるんですか。

池田…水がちよっと変質します。

水道水だったのが問題だったのかもしれないですね。水がちよっとドロドロしたりして、それは代えないといけなくなりました。銅イオンがあれば、そういう現象は起こりません。ただ、木簡のなかには有機質のシミが付いているものもある。これについては、保存処理をしてちよっと綺麗にしないとい



写真33 木簡の積読調査(左から橋本義則、池田、八木充)(1997年)

けない。だから全く保存処理をしなくて済んだわけじゃありません。特にあの長大な一〇頭の馬の種類やら書いてあった木簡、あれは出土した際に真っ黒で、一応赤外線を当ててみたら文字が出てきて。保存処理をしてあの真っ黒さがなくなりましたから、良かったです。

佐藤…保存処理をすると、それまで付着していた重金属イオンが剥がれるので、相対的に木の字肌が明るくなって、墨が目立って読めるようになるんです。保存処理終わった後、もう一回読むと、出土した時に赤外線を読んだよりも読めるようになる場合があります。だから保存処理した後、もう一回読み直した方がいいと思います。

池田…ええ、そうですね。

【写真33】

○ 銅製錬のカス「カラミ」について

渡辺…銅採掘・生産のノルマは、たとえば鑄銭司で一年に生産すべき銭の量などから推測できますが、その過程で発生するカラミの体積は相当量でしょう。

一世紀も作業すれば、体育館一杯分くらいにはなりますよ。

池田…ええ。鉱石から製錬・精製する際、九割はカラミになりますから、それは膨大な量です。

佐藤…あれも遺物だけれど、現地に埋もれたまま保存しているという状況ですね。渡辺…例えば、時期・段階による技術レベルの差で、カラミのなかの銅の残留割合とか成分とかが異なるということはないんですか。

池田…それが、ないんですよ。明治時代の水準と同じなんです。最初は僕らも素人考えで、古代のカラミは銅の成分がかなり残っているんだろうなと思っていました。ですが実際に成分分析してみたら、がっかりです。カラミの分析では時代判定できないということが分かりました。逆に古代の技術の高さを思い知らされました。おそらく、自然に分離するんですよ。人間が意図的にやろうと思つてやったんじゃない、溶かすと理屈的にそうなるんですよ。

渡辺…すると、温度を上げる技術さえ確立すればいいということですか。池田…それと、熔媒剤が重要ですね。長登の露天掘りの箇所では、石灰岩とそして熱年変化で出来た石英がある。褐鉄鉱のなかにも、銅が二〜三%入って

る。それと通常の銅鉱石もある。それらを掘って、一緒に溶かす。結局、熔媒剤と一緒に運っていたんですね。それを一緒に溶かしたから、うまく銅ができます。非常に運のよい希有な例じゃないかな。素人は銅鉱石だけを溶かそうとしますが、それではカラミがうまく分離しない。銅製錬のコツは、カラミを上手に作ることです。それを上手に作って出した後、残ったのが銅という逆転の発想だけど、それが基本的な方法論なんです。

佐藤…銅を出そうとするのではなく、カラミを出そうとして、残ったのが銅なんです。

渡辺…そういう技法というのは、もちろん人類の最初の頃からみたら、ある程度、試行錯誤があったはずですが、長登に入ってきた段階では、ほぼ完成形態に近い形で入ってきたということですか。

池田…今のところ、ちゃんとしたカラミしか見つからないので、そう考えています。ただ今後、不純物が多く混じったカラミが見つかれば、もう少し違った見方ができるかもしれません。

渡辺…やや眉唾ではあるけども、最近、長登銅山が官営で採掘される以前から、この地域で民間の採掘が行われていた可能性も想定されていますよね。その段階で、完成度の高い技術が導入されていた可能性もあるわけですか。

池田…長登銅山の本格稼働以前から、この地域で銅の採掘が行われていた可能性はあると思いますが、残念ながら、残念ながらその段階の技術のことは、現時点では何も分らないです。ただ、中世期〜江戸初期には地下水の下のレベルで硫黄を含んだ硫化銅鉱の採掘になったと思うんです。銭屋遺跡にもありますけども、その頃は白目をたくさん作っていたんです。鉛の鉄砲玉、そちらの生産の方が優先されていたかもしれません。その炉のカラミを見ますと、長登で出てくるようなカラミと違って、八〇cmぐらいの大きな固まりになっています。一m級の大きな炉で深さが五〇cmもある炉もあります。どういふことをしたか分からない。初期に硫化鉱を処理した段階では、試行錯誤もあったろうから、そんなようなものが最終的に三〇cmの吹床になったという可能性もある。まあ、その辺は関連する古代の遺跡があまり見つかっていませんから。まだこれからの課題ですね。

渡辺…その種の技術は、本にして広く継承されるわけじゃないから、あるグル

ープの作業が一旦終わってしまおうと、次世代へは技術が継承されない可能性もあるわけですよ。

佐藤…確かに。

池田…『豊前国風土記』逸文に、香春岳の銅に関する記載がありますから、七世紀以前はそちらの方が先進的な技術を持っていた可能性がありますが、八世紀にはどうも忘れ去られてしまったようで、八世紀には長登から豊前の方へ銅を送っていて、九世紀には長門国探銅所が銅製錬の技術指導をしている。私は香春岳二の岳西南斜面の中腹にある「香春岳銅山」が長登銅山跡に酷似した「洞穴坑」で、古代の可能性があると考えているのですが、残念ながら企業の所有地で調査がままならぬ状況です。

渡辺…技術の継承というのは、それなりの組織的なバックアップがないと、なかなか難しいんじゃないですか。

池田…ある程度のレベルの技術でも、断絶してしまつて、次の段階へと発展しない場合が多いのではないのでしょうか。なぜかは、よく分からないですが。

○ 古代銅製錬復元実験

佐藤…そう考えると、いまの長登吉野ヶ里とか三内丸山の時みたいなの戦略が必要でしょうね。いままでもシンポジウムで盛り上がったり、池田さんが炉を作つて再現実験したのはよかったです。

池田…あの復原は良かったですね。あれをやつて、僕らもやつと銅製錬の理屈が分かってきました。

渡辺…でも、古代の人はああいう作業を毎週やっていたわけでしょう。

池田…たしかに僕らは、一年に一回ですから。次やる時には、忘れ



写真34 第五回銅山まつり 第10回銅製錬実験 (2012年)

には、

ていることも少なくない。ただ、さつき話題になった現地体験主義、これは重要ですよ。目で見て覚える、体感する。技術畑では、これが一番です。炭をいっつ頃入れて、いつ出すとか、文字で記録したって上手くいくはずがない。だから、敢えて書かないんですよ。身をもって覚えるしかない。

【写真34】

渡辺…池田さんたちの再現実験がすごいと思うのは、例えば僕や佐藤さんが史料調査をする時に文字を読んだとしても、自分たちは筆でああいう文字は書けないわけです。そこまでやってないわけですよ。そこまでやったっていうのは、すごいなと思います。

佐藤…確かに。

池田…あの実験は、私一人ではじめたんじゃありません。調査指導委員の葉賀先生が病で退任された後、植田晃一（同和鉱業製錬部長で、国際資源大学校講師）さんという人に来てもらった。その頃、きらら博（二〇〇一年）をやる時に、県が「三〇〇万円出すから、美東町は何かやらんか」と言うから、「シンポジウムやりましょう」ということになって、その時に植田先生に再現実験できないかなと聞いたところ、「やれないことはないが、ちよつと費用が掛かるね」と仰るので、県の補助金を使ってやってみようということになったんです。植田先生あつてのことで、四月一日のことです。

それで、九月に実験をやるために、四月に入ってから急遽予算を組み替えて、結局、予備実験と本実験の二回の実験をやりました。だからシンポジウムに呼びした先生方の謝金も少なくなったと思います。現場では、地元のボランティアの人たち、退職して年金生活している人たちが「面白いからやろう」って、それはもう興味を持ってやってくれた。この人たちの助けがあったから、建物の増築ができたりしたんです。実験がうまくいった背景には、いろんな人の熱い思いがありました。

渡辺…再現実験は今も続けてらっしゃいますが、どの程度の費用が掛かっているんですか。

池田…いまでも、僕らボランティアと美東中学の生徒がやっていますから。ほぼ材料費だけです。土は山から採るし、鉱石は貿易会社などから寄付してもらっています。最初はオーストラリア産の鉱石を日商岩井から輸入してやりました。



図35 シンポジウム「古代の銅生産シンポジウムin長登」チラシ表面(1991年)



図36 シンポジウム「古代の銅生産シンポジウムin長登」チラシ裏面(1991年)

○「古代銅生産シンポジウムin長登」と国史跡指定

渡辺…ところでシンポジウムの話が出ていましたけれど、シンポジウムをやったことで、当然地元もそうですし、地元以外でも波及効果があって、その後の調査・研究にメリットがあったとか、そこら辺はどうですか。

池田…はい、それはかなりありましたね。もともと製鉄遺跡の研究は、結構進歩していったんです。なぜかというところ、日本ではどこでも砂鉄が取れるので、古代から民間でやっていますから、いろいろな所に遺跡がある。中国山地のタタラの製錬場も、あっちこっちで発見されている。だから研究も進む。一方、銅に関する遺跡は銅鉱床の近くにしかないし、本当に閑散としているんです。でも、このシンポジウムで本格的な研究の第一歩が踏み出せたんじゃないかなと思います。

【図35】・【図36】

シンポジウムでは、佐藤先生にも講演をいただきましたね。内容は別添チラシのとおり山口大学の八木充・近藤喬一両先生を中心に第一線の先生方にご参加いただき盛大になりました。植田先生の紹介でソウル大学の羅教授にも日本

語で講演をいただき、また、恩師坂詰秀一先生が欠席で代わりに古代学協会の角田文衛大先生がお供を連れてこられたのはびっくりしました。急遽、懇親会の挨拶をお願いして義理を果たせましたがね。特に、三日目に長登木簡二〇〇点を初公開して、文字の判読検討会を催しましたが、多くの古代史の先生方が参加されて積文が統一出来たのは大きな成果でした。赤外線カメラが大いに役立ちました。

ところで僕がああシンポジウムを大々的にしようかと思った背景には、前年末の旧石器捏造問題(二〇〇〇年一月六日に報道)があります。最初は、シンポジウムは単に銅生産の研究発表でやろうと思っていたんです。ところが僕は一月四日から東京へ行っていて、六日は文化庁に一〇時頃行ったら岡村道雄調査官と史跡指定の打ち合わせをする予定だったんです。ところが文化庁に行ってみたら騒がしいんですよ。どういう訳か岡村さんには会えなくて、結局、坂井秀弥さんが出てきて、史跡は地図指定にしようという方向で話がまとまったんです。

渡辺…地図指定とは、どういうものですか。

佐藤…史跡の指定の方法には、何丁目何番地何号と書き上げた地番指定と、地図でこの範囲が史跡だとする地図指定の二種類があります。このうち、地図指定のほうが範囲が正確になります。

池田…ちょうど美東町は地籍調査を始めたばかりで、正確な図面がない。とりあえず地図指定して、あとで細かい情報を埋めようということになりました。それが決まって、帰りの新幹線で電光掲示板を見ていたら、旧石器捏造のニュースが流れていたの、びっくりしました。昼間、文化庁に行つてバタバタしていた理由がよくわかった。

一連の旧石器捏造事件をめぐることは、喧伝された「成果」をめぐる学術的な研究会も開催されていないし、報告書も出されていない。「画期的な成果が出た」というマスコミ報道ばかりが先行してましたから、長登銅山については学術的に根拠があるシンポジウムを開催して、きちんと成果を示さないとけないという思いを強くしました。

渡辺…そうすると、池田さんが今まで続けている再現実験というのは、旧石器捏造がなければ行われなかつたんですか。

池田…一連の再現実験に至る経緯については、近著『製銅の考古学』（北隆社、二〇二五年）にも書きました。私は長登銅山から出土した炉跡や各種の遺物から、古代の銅製錬は円筒型炉で行われたと考えたのですが、冶金学界ではなかなか認知されなかつた。たとえば『季刊考古学』六二号（一九九八年）で銅生産の特集を組んだ時、長登に関する論文を私が書いたら、編集部から論旨の変更を求められたこともあります（書き換えはしませんでした）。この頃、植田先生も井澤英二先生も、酸化銅鉱の製錬は円筒型炉じゃないとだめだと仰る。長いシャフトがないと一酸化炭素が供給されないので還元しない、地面を掘っただけでは一酸化炭素が少ないし、とても還元なんかできないということです。自分でも遺物のみからの想定には不安なところもあつたので、植田先生と相談して、「よし、やってみよう」ということになった訳です。

○ 美東町史改定版と史跡指定・資料館の建設

渡辺…ここで、長登銅山文化交流館の開設までのお話をお願いします。

池田…僕が美東町に入った時の上司が清水と言つて、すぐ近所五〇〇m離れた

ところに家がある人で、一緒に美東町文化研究会を作ったり、いろんなことをやってきました。この人が、一九九七年一月に町長になつたんです。その清水さんが二〇〇二年一月「池田君、美東町がそろそろ四〇周年になる。そして今、市町村合併の話も出てるし、最初的美東町史を作つてから三〇年になるから、改正版を作ろう」と。最初的美東町史は、当時係長だった清水さんが頑張つて編纂されたんです。三〇年経つて、その間に長登も発掘したし、いろんなことが分かつたからつて、町長の一声で改訂版を作ることになった。ただ期限は二〇〇四年までと、たつた三年しかないんです。それで中・近世は最初の版のままにして、古代・現代を改訂することにしました。それと、資料編を別に作りました。そこには、木簡とか鉱山遺跡とか、町内の神社の石造記念物の実測、それと地名を載せました。僕は税務課にいましたから、字（アザ）名を地図にみんな落とし込んだ手製の資料があつたんです。それで地図上に字名を入れて印刷したから、地名が歴史研究に役立つようになったと思います。最終校正は東京のホテルでやつたんですが、ちょうど東京に台風二一号が来たんです。それで荻窪のホテルで四日間缶詰になつて最終校正しました。

佐藤…これは合併前に、美東町の歴史をちゃんと出しておこうつていうことですよね。合併したらもう新しい美祿市のことしかできないから。

池田…はい。そんな感じで、なんとか期限までに刊行にこぎ着けたんですけども、その間に合併が頓挫して、この時は美祿市にならなかつた。美東町史は一六〇〇部位印刷したんですけども、合併頓挫で多くが残ってしまいました。

渡辺…合併すれば、合併先の人も買ってくれるというつもりでこれだけ刷つたと。池田…はい。

池田…そうこうするうち、二〇〇三年七月二五日に長登銅山は国指定になりました。九大の西谷正先生らが前年の春頃来られて、その後、文化財審議会を通したと記憶しています。その頃に面白かつたのは、二〇〇二年七月二九日に田口係長と森田主事同伴で文化庁に行きまして、担当官を相手に半日じっくり説明しました。こういういうことをするんだな、すごいなと思いました。

佐藤…史跡指定するときは、地権者の人たちの同意書をどうするかつていう話になるんですよ。今、地方だと地権者の世代が二代ぐらいたつて、同意書を全部取るかつていうと、その人たちの一人はもうブラジルに行つちやつて、音沙

汰もないよみたいなのがあって、それをどうするかっていうのを総務係の事務官が、全部チェックするんです。

池田…それはうちにもあります。当時、地権者が四〇名ぐらいいましたが、共有地なんです。アメリカに行ってるのも韓国に帰っているのもあるし、結局一部は町長名で保証しますって、それで済ませました。ただし明治頃の所有者からずっと辿っていくと、東京に住んでいる人もいます。そういう人は土地が1㎡でもあればそれなりの財産だと勘違いして、色々言ってくるんです。こっちは山の中で、土地が安いんだって説明しても分かって貰えない。逆にゴタゴタする。全部解決するのに、半年以上かかりました。ほんとうに大変でした。

この後、二〇〇六年から再び合併話が軌道にのって、一年間バタバタしました。長登の資料館は、合併前に設計して、どういう建物を建てるか決めました。また地元の人たちと長登銅山環境保全協議会を作って、役場の主な課長と地域のいろんな団体の代表者と長登の地権者一〇人で、四月から月二回ぐらい、将来どうするかを議論して、とにかく長登に資料館を作ろうと話し合いました。

その頃、箱物反対って、ある政党がキャンペーンを張りまして、それに美東町文化研究会の会員たちが対抗して、署名を集めることになりました。町民全部一八〇〇戸を回って署名を集めて、どうにか美東町は合併の条件として長登資料館をお願いしますということになった。ただ僕は合併しても一年しか居られないし、新たな職に替わるのもいやだし、五六歳からだんだん給料が下がっていたから、退職金も同じだし早く辞めようと思っていました。ところが倉益卓雄町長から「お前が辞めてどうするんだ。資料館は誰がやるんか」と言われて、もうちょっと頑張ってみるかということで、一年残りまして資料館建設に携わりました。

【写真37】



写真37 建設中の長登銅山文化交流館(2008年)

これが大変でした。業者に任ずるのはいいんだけど、秋ぐらいから陳列の方式を決めるのに、だいたい遺物の大きさが分かっていたから、とりあえず机上で、図面で決めました。その展示スペースができるのが、二〇〇八年二月中旬です。そこで初めて、どこに何を置こうか正式に決め始めました。その間、一月に映像ソフトを、二月に交流館の展示の説明原稿を作りました。四月から非常勤の交流館長に任命されましたが、四月一日はまだ内装中で交流館の建物には入れず、隣の昔ながらの資料館勤務で、展示資料を集めて並べて準備し始めました。四月一四日に交流館の布クロスと展示台が完成です。一七日にキャプションができあがった。一九日に交流館へ展示品の搬入を始めました。で、二四日開館です。この一週間は殺人的な大変さ、いやもう大変でした。

【写真38】

渡辺…この建物ができる前は、遺物はどこに保管していたんですか。池田…隣の資料室(館)です。今、僕らが整理作業しているところです。だから大体、その置き場そのものがどんなものかは頭にありました。だからできたんです。そうじゃないと、展示を一週間で準備するというのは無理です。今考えても、よくできたなと思います。ただ実際に並べてみたら、もうごちゃごちゃなんです。ある人が来て、「わあ、ごちゃごちゃしているね」って言われました。いわゆる美術館・博物館は、美術品じゃないけど、ちゃんと並べるじゃないですか。それが、ここではババババって並んでいるから、どれがメインか分からないうえです。でも当時、下関市立考古博物館も土器をズラッと並べていて、あれいいなあと思っていました。とにかく遺物は並べればいいんだ、美術品じゃないんだと。でも、不評を買いました。そういうことで、やっと念願の



写真38 長登銅山文化交流館の竣工式(前列左から、井澤、植田、狭川東大寺管長、倉増元町長、小泉、中西。中列左から池田、華光寺、堀井、小笠原、森重。後列左から吉川、高橋、森田、高橋。) (2009年4月24日)

資料館ができました。

渡辺…学芸員の資格は誰が持っていたんですか。

池田…学芸員資格は要りません。文部省補助の博物館じゃなくて、あくまで交流館ですから。私も学芸員資格はクリアしてましたから申請すれば直ぐ取れたと思いますが、必要無かった。あの頃の農水省は、文化面まで間口を広げていたんですよ。農水省ですから、交付金の使い方の条件も縛りがゆるい。たとえば電気の配置一つとっても、文科省とは違ってなにも口出ししてこないんです。備品も、みんな交付金の対象なんです。それも過疎債でやりましたから、総事業費一億五〇〇万が、地元側の持ち出しは二〇〇〇万円位で済みました。実質的に八割補助みたいな状況です。

この事業では、県の中山間地域振興課と相談のうえで、年間一万人の入場を見込んでいました。当時は、計画の七割いけばいい条件でしたが、いまでは修学旅行生も来るようになって、子供たち、青少年たちの教育の場になっていきます。こんな田舎でも、奈良との関係があるなんていう夢を持てる。実際、このご縁のおかげで、東大寺さんは、美祿市の中学生が修学旅行で行くと、みんな大仏様の台座の所まで上げさせてくれるんです。

渡辺…交流館には、どれくらいの範囲から修学旅行生が来るんですか。

池田…今は広島の小中学校が多いですね。コロナ禍になって、それまで九州あたりに行っていたのが、こちらに来てくれるようになりました。四・五年前から急に多くなりました。そういう生徒に、鑄造体験等をやってもらいます。最近、コロナが収束してきて、少し減っているようですがね。

○ 秋篠宮殿下・妃殿下の訪問

渡辺…交流館の維持に、経常経費はどのくらい掛かっているんですか。

池田…臨時雇用の職員が三名ですから、人件費を入れて年九〇〇万円程度です。

その後、二〇一八年には秋篠宮殿下・妃殿下が来られて、僕が案内役をしました。あの宮さんや奥さんは結構歴史が詳しくて、二〇分の予定が結局四〇分ぐらいおられました。質問も多かったです。天皇陛下も、皇太子の時の一九九三年夏にいらっしやる予定だったらしいです。警視庁の人が、警備のために東京から長登の地形を見に来たことがあるんです。八月の全国緑化大会に

来られる際、長登も見られるかもしれないという話になりましたね。ところが六月に、雅子さんと結婚されたでしょう。それで警備は無理だからと、長登にお越しになる話は立ち消えました。ですが、この噂話のおかげで、八月に最初のプレハブ(今の資料室)を作ってもらえたのは良かったです。

【写真39】

佐藤…警察が動いたのなら、本当に可能性があった話なのでしょう。事前に、皇太子さんは長登について勉強されていたかもしれないですね。

池田…一人だったら、来られたと思います。その三・四年前には、佐波川の関水を見に来られていました。佐藤…ああ、あの方のご専門は海上交通だからね。

○ 現代の遺物整理作業

池田…こんな感じで七〇歳になりました。交流館時代の一〇年間は、特別専門員という非常勤職員でしたが、二〇一九年からは、報告書を作る仕事を引き続きやってくれと言われて、作業員として携わっています。それで、遺物実測なんかを何十年かぶりにやりだしました。そして、遺構実測図をトレースしようとしたところが、「トレースは業者に委託するから」いいと言います。聞いてみると、「今時は、遺物の実測はパソコンが、現場の実測は業者がやるから」なんて言うんです。

佐藤…最近、何百平米もある遺跡を二・三〇〇人の作業員さんを使って毎日掘っている埋文センターでは、計画立案と写真撮影と報告書執筆ぐらいが調査員さんの仕事で、それ以外の遺跡の実測も遺物の実測も全部作業員さんの仕事になっていて驚いた。ただ奈文研でも、たとえば瓦の拓本を採るとなると、調査員よりも現場のおばちゃんの方が上手ですよ。毎日やって慣れた作業員さんは、



写真39 秋篠宮殿下・妃殿下の視察(2018年)

下手な大学出たばかりの調査員よりは、ずっと上手に実測するんです。今だとコンピューターを使って、若い女性のオペレーターが実測したりして。それで調査員の方にいろいろ聞くと、「二万平米の遺跡の発掘を四〇〇人の作業員を使って、調査員一〜二人で回しています」と。「自分にできることは、勢いよく掘る人に大きな溝を担当してもらって、丁寧に掘る人に小さな遺物が収まっている土坑を掘ってもらおうという差配くらいです」と。「自分の学生時代のように、全部ずっと付いて発掘するなんて、とてもできません」と。

池田…そういう時代なんでしょうね。大学でも、いまは実習がないんですね。佐藤…いや、ありますよ、コロナ禍の最中はなかった。友人の考古学の人に聞くと、コロナの時は合宿できなかったから発掘現場に連れて行けなかった。そういう世代は現場で先輩の指導もできないし、どこかの教育委員会に勤めても、大丈夫かなということですね。

池田…僕らでも実測をしているうちに、この遺物はこうだっていうのは分かる。今まで思ってたようなことに気づくんですよ。

佐藤…手を動かさないとダメですよ。それで実測を作業員さんがやるとなると、調査員がきちんとモノを見ているのかということになる。

渡辺…文献史学の人でも、現物を見ずに、活字本やDBだけで考える人は、発想がかなり限定されますよ。

佐藤…私が奈文研に入所した頃、考古の人の入所試験では、遺物を実測させていました。一般的に、文献の人が考古学の報告書を見たら、実測図は正確なものだと思ってるけれど、一〇人の人が実測したら、一〇種類の実測図ができるんですよ。土器だったら、土器のどこに特徴があるかみたいなのを含めて実測する。その特徴をどう捉えるかっていうのを理解するか。文献史学の人が『続日本紀』の同じ記事を読んでも、いろんな見方ができるようなものです。

池田…美祢市でも、採用試験では実測をさせます。僕もそういう試験の問題を作りました。ただ実測図の出来は、点数化されないうんですよ。だから別の問題の方の点数で決まってしまう。実測図はこっちの方がいいなと思っても、採用には関係ないんです。もっと専門の分野の声を聞いてもらいたいと思いますからね。

佐藤…人事部局の人には、実測図の出来栄は判断が付かないから「数値化す

るな」となるけれど、本当は点数をつけるべきですよ。ベテランの考古学の人が見れば、こっちの方が遺物とちゃんと格闘している人かどうか分かる。渡辺…そうになると、面接点で調整するしかないですね。

池田…いや、専門官は面接には出られないから、かわいそうなことになる。部長とか副市長には、専門性の判断は付かないので。

佐藤…本当は、専門家も面接に出させてもらうべきですよ。私は奈文研の入所試験の時に、文化庁の監査官とか偉い人がいただけじゃなくて、坪井所長・狩野部長をはじめ二〜三人に取り囲まれて緊張しながら受けました。その時、坪井さんに「あなたは土田直鎮さんお弟子さんだそうだけれども、お酒は飲めるのかね」と言われて、「はい。人並みでございます」と答えた記憶があります。渡辺…そういう質問が来たら、もう半分受かっているんじゃないですか。

池田…まあ、そうですね。でも本当に、時代が変わってきました。でも何とかして、人材育成はやらなといけません。

佐藤…考古学の専門家が実測しなくなっちゃうのは、ちょっとまずいですね。池田…これは、由々しきことです。3Dスキャンすれば、手でやるよりも綺麗な実測図ができるとはいえ、もっと実物をじっくり見ないといけない。

佐藤…実測図を書くときに、物を見るわけじゃないですか。それで、ここが人工的だとか判断する。

渡辺…現物を見る経験が少なければ、質感に関する判断だって全然経験が溜まりませんね。

池田…僕なんか未だにトレースペンでやっていますが、周りからは何やってんだろうかと思われている。

佐藤…今の若い人は、トレースしないんですか。ロットリングは使わないんですか。

池田…トレースはしないし、ロットリングも使わないです。渡辺…いまは、遺構の実測もスキャナーでやるんですよ。

池田…そうですね。そのスキャナーと、原図そのものをスキャンして、業者がそれをつなぎ合わせるんです。僕らがコピー機で縮小したりしたのと比べると、座標軸はきちっと出ますので正確ではあります。

渡辺…昔は、隣の場所を次の年に掘ったら、前の年の図面が繋がらなかったと

いう話がよくありましたが、そういうことは、業者任せればなくなるんですか。

佐藤…多分、業者はX座標・Y座標を詰めて図化しているからね。

池田…座標がしっかりしていればそうだけでも、近年、世界座標に変わったんですよ。だから昔の座標を合わせるのがややこしいのではないかな。

佐藤…あとね、東北大震災の時、宮城県多賀城市で斜めに一・五mぐらい地面がずれてる。そうなるのと、以前の実測図と、それ以後の実測図は合わなくなる。そういうこともあります。

池田…僕は長登の遺構を埋め戻すときには、トレンチのコーナーにヒノキの丸太を並べて置いています。一九九〇年度に木簡が出たところを、一九九六年に掘って、ちゃんと出ましたから、図面をそれに合わせました。すると断面実測図がピッタリ一致しました。座標では合わせていません。

渡辺…なるほど。誰も使っていない土地だからできる方法ですね。

○ これからの長登銅山跡の方向

渡辺…最後に、お二人から、これからどういう体制で長登の発掘・調査・保存をすべきかについて、それぞれご意見を伺いたいです。

佐藤…池田さんは言いにくいかもしれないので、私から先に言います。やっぱり長登銅山跡というのは、日本古代史にとって非常に重要な遺跡です。銅生産とか官営工房という観点からも、出色？な遺跡です。その歴史的な価値は、国指定史跡という形で公的に認められているけれども、まだ十分に周知されているとは思いません。指定の前後にはシンポジウムをやったりして、研究者だけでなく地元の方にも、ある程度は知られていると思います。もっと知られてほしいし、調査・研究をもっと本格的に進めてほしいんです。もし調査ができなくても、これまで出た情報を使って研究は積極的に進めてほしい。現状では、調査・研究が終わった遺跡みたいな、過去のみみたいな扱いになってしまっている。私はこの遺跡の価値を高めて、発信するための事業を、例えば発掘周年とか、報告書刊行とかいった機会を捉えて、研究会・シンポジウムをやるとか、特別展をやるとか、あるいは全国の主要都市で出展帳(※貴重な収蔵品を他の地域で特別公開するイベント)をするとかして、この遺跡の歴史的な意義を、現時点の学術的視点で再確認できるといいなと思って

います。

そうした活動の拠点として、美祢市の交流館が重要になってくる。現状では正規の職員がいらないというお話だったけれども、国指定史跡を維持して情報発信するためには、やっぱり正規の職員の方がいて積極的に活動するという体制が不可欠です。それと並行して、学術の世界で繰り返し長登銅山の歴史的意義を再確認してもらえるようにしていく必要があると思います。

それと私が強調したいのは、あの木簡が八〇〇点出たトレンチの隣に、さらに何万点という木簡が埋もれていることは間違いないということです。保存を重視して無理に発掘しなくてもいいという考え方もあるけれども、あそこにはまだそういうお宝が眠っているということは忘れないでほしいです。

池田…そうですね、木簡の削り屑層がありました。埋め戻しています。まだまだたくさん木簡があると思うので保存状態が気になりますね。地表面から一m以下は谷水の地下水が流れていると思います。扇状地形ですから。特にあの発掘した上手の堤の土手の下、あれは完全に生きています。その土手を取っ払うのが大変で、なかなか掘ろうという風にならないというのが現状です。

佐藤…私の希望としては、調査体制を整備してほしいとは思っています。ただ、出土した木簡をどう保存するかということも含めて、それをどう使って調査・研究して、保存処理までしていくかを考えると、結構な大変なことをセツティングしないと続かないと思う。そのためには美祢市教育委員会に担当の方が何人かいるような体制を採ってほしい。ただ掘ればいいということじゃない。

池田…現状では、むずかしいです。そもそも考古学やろうとする人も減ってきているし。採用も、しにくい。

佐藤…そういう問題を解決するためにも、美祢市でそれなりの体制を整えていかないと、次の調査へ続かないですね。

渡辺…ただ美祢市は、財政的にそんなに強い自治体ではないですから。

佐藤…私は、長登銅山の歴史的な価値というのは、日本史上でも本当に大きいものだと思います。そういうことを、何度も、例えばシンポジウムなどで発信していただいて。そういう積み重ねをしていくと地元でも長登銅山を大事

にしようという機運が、もっと高まっていくのではないのでしょうか。

池田…今、市長は、意外と本気で、歴史的なことに興味は持ってくれています。旧町史の補遺的に『美祢市史』も作ろうとしています。ただ財政的なことになると、なかなか市長の一存で決めるのは難しい。

渡辺…気運を盛り上げるといふとき、新しい発掘をしていない、新しいものが出てきていないのに、シンポジウムだけやるといふのは、一般の方へのインパクトが弱いでしょうね。小規模な調査でも、継続的に進めていて、その報告会も兼ねて発表する方が盛り上がると思います。

渡辺…ところで、さっき佐藤さん仰っていた出開帳というのも、広く社会に働きかける方法として効果がありそうですね。佐藤さんが館長をなさっている博物館でも、協力してくれるかな。ただ、発掘も含めて本格的にやるとなれば、長登側で計画に責任を持つ正規職員の存在が欠かせないでしょう。それと、佐藤さんのお話の中で、「終わってる感」があるというご指摘、ここは難しいところで、そういう先入観で研究が止まってしまうパターンがあるのは間違いない。ただ一旦そうなってしまうと、何の弾みに別の雰囲気を出す必要があつて、そのためには矢張り少しずつでもリアルタイムで発掘が続いている状況というのが必要になってくると思います。美祢市のように体力の弱い自治体の場合、それが大きな負担になる。佐藤さんが仰った、専門の担当者を増やすということも含めてね。

佐藤…確かに、美祢市だけでやれというのは大変かもしれない。その場合、山口県とか、山口県立大学とか、そういうところの協力を得て、もう一回、長登銅山が何を語ってくれるか、現代の視点で深掘りをして、それをみんなで確認しようという事業を科研でやるとか、やりようは色々あるでしょう。

渡辺…長登という遺跡は、潜在的なアピールでできるキャパシティーを、まだ使っていないように、私は思っています。たとえば、大学の授業で「やまぐちの歴史」という授業をやると、長登の話をして、山口県出身の学生でも、かなりの数の人が知らないですよ。少なくとも県内では共通認識になってるだろうと思つて、今の勤務校に着任したので、正直びっくりしました。そういう現状だから、長登に専属の職員を一人置いて、その人が各地の小・中学校・高校などを対象に押し売り授業をして回るだけで、ずいぶんと県内の雰囲気は

変わるんじゃないかなと思つています。池田さん、どうですか、そこらへん。

池田…今、周防鑄銭司の調査に関わっていますけども、ここは二〇一七年以来ずっと調査を続けていて、毎年何か新しいモノが出土して活気がありますね。

ちよと今年が鑄銭司設置一二〇〇年祭で、学校の授業でも取り上げられているようです。最近、鑄銭司関係のシンポジウムなり研究集会なりを、山口市はよくやっています。美祢市とは近隣で、同じ銅工業がテーマですから連携してやればいいんじゃないでしょうかね。

渡辺…あれは、なかなか戦略的ですよ。山口大学と共同で継続的に発掘を続けるうえ、マスコミへも強くアピールして、やってくる感を示すというやり方がうまい。

池田…記者会見なんかも、かならず市長を引っ張り出して言わせる。あれは、うまい戦略です。

佐藤…ぜひ美祢市でも、おなじようなことを。

池田…ただ美祢市の場合、職員の体制もあつて、なかなかあそこまではできない。その辺の体制づくりを、もう一度市長に物申していく必要があるかなと思つています。

もう一点、今、美祢市は世界ジオパークを目指してやっている。これに、ものすごい力を入れていきます。長登銅山は、秋吉台と大嶺炭田と共にジオパークサイトの柱と位置付けられています。ここで問題なのは、ジオパークはジオパーク推進課が担当で、長登銅山は文化財保護課の担当なんです。その縦の関係もあつて、長登を特別扱いするのが難しい状況にある。今の調子でいけば、来年四月には世界ジオパークになるでしょうから、それで一段落すると思えます。また『美祢市史』の増補作業も始まりますから、今後は文化財を重視するような発想を強くしてもらつて、大きな記念行事ができるんじゃないかなと期待しています。遺跡調査も、職員体制の不備で実施できない状況ですが、どうにかしたいと考えています。

佐藤…ジオパークは全国にあります。長登銅山のような史跡と結びついた方が説得力・集客力もあると思うんですけどもね。

池田…ジオパークは、地域交流とか特産品の掘り起こしとか、そういう方面に力を入れています。啓蒙はしますけども、さらに深く踏み込んで研究に持っ

ていこうという方向性はないです。どちらかというと、地域に人が来るように、観光的な要素を重視する側面が強い。

佐藤…でも、観光の元には学術的な基礎がないとダメだと思えますけどね。

池田…そうです。観光が発展するのは良いことです。しかし長登は、地質調査がまだ不十分なので、ジオパークを機に取り組んで欲しいと思います。また、史跡の方ですが、肝心な古代の役所跡がまだ分かっていません。それに、指定地域外に中世から近世の製錬所の跡が数カ所ありますが、この発掘調査もいざれ行つていこうということで、指定にはしておりません。長登は古代から近世までの銅生産を明らかにする遺跡として、国内唯一のたいへん貴重な遺跡です。これからの調査と追加指定が望まれるところです。本当は、そういうことをやって欲しいんですけどね。

(二〇二五年一月一一五〜一六日 新山口YIC応接室・交流活動ホール)

池田善文 [業績]

①単行本編著

池田善文	『美東町文化財調査報告書 I』	美東町教育委員会	1975年
池田善文	『長門末原窯跡』	美東町教育委員会	1979年
池田善文	『解説・長登銅山跡』	美東町教育委員会	1995年
池田善文	『日本の遺跡49 長登銅山跡—長門に眠る日本最古の古代銅山—』	同成社	2015年
池田善文編著	『明治維新の序章 大田・絵堂戦役』	大田・絵堂戦役150周年記念事業実行委員会	2017年
池田善文	『シリーズ「遺跡を学ぶ」164—東大寺大仏になった銅—長登銅山跡』	新泉社	2024年
池田善文編	『製銅の考古学』	ニューサイエンス社	2025年

②主要研究論文：単行本共著

池田善文	「藩政の改革大田絵堂戦」	『郷土』4号	山口県立美祢高校郷土研究部	1966年
池田善文	「美祢地方の伝説考」	『郷土』5号	山口県立美祢高校郷土研究部	1967年
池田善文	「菅原道真公の自画像の由来」	『郷土』5号	山口県立美祢高校郷土研究部	1967年
池田善文	「真木発見の配石遺構」	『秋芳町地方文化研究』5号	秋芳町地方文化研究会	1969年
池田善文・松岡史ほか		『福岡バイパス調査報告書』	福岡県教育委員会	1973年
池田善文・村岡和雄ほか		『幸崎古墳・松ヶ迫遺跡』	山口県教育委員会	1974年
池田善文	「古代長登(奈良登)銅山遺跡について」	『温故知新』創刊号	美東町文化研究会	1974年
池田善文	「奈良と長登」	『山口県文化財』5号	山口県文化財愛護協会	1975年
池田善文	「赤郷つば市出土の和鏡について」	『温故知新』2号	美東町文化研究会	1975年
池田善文	「松が迫遺跡の発掘調査」	『秋芳町地方文化研究』11号	秋芳町地方文化研究会	1975年
池田善文	「奈良登銅山遺跡」	『日本考古学年報』26(1973年版)	日本考古学協会	1975年
池田善文	「秋吉台周辺の先史・原始文化(概論)」	『温故知新』3号	美東町文化研究会	1976年
池田善文	「大田絵堂戦役秘話」	『温故知新』4号	美東町文化研究会	1977年
池田善文	「末原窯跡の発掘調査概報」	『温故知新』5号	美東町文化研究会	1978年
池田善文	「山口県中央部の弥生遺跡(1)」	『山口県の弥生式土器』	周陽考古学研究所	1979年
池田善文	「山口県の古代窯跡—末原窯跡の性格をめぐって—」	『温故知新』6号	美東町文化研究会	1979年
池田善文・井上行敏・河本芳久	「美祢市・美祢郡の主要遺跡の概要」	『山口考古』	山口考古学会	1979年
池田善文	「秋芳町の古墳文化(上)」	『秋芳町地方文化研究』15号	秋芳町地方文化研究会	1979年
池田善文	「秋芳町の古墳文化(中)」	『秋芳町地方文化研究』16号	秋芳町地方文化研究会	1980年
池田善文	「景平遺跡発掘調査の概要—第一次・第二次調査—」	『温故知新』7号	美東町文化研究会	1980年
池田善文・桑原邦彦	「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」	『山口県の土師器・須恵器』	周陽考古学研究所	1981年
池田善文	「古代長門国採銅所の予察」	『山口県地方史研究』48号	山口県地方史研究会	1982年
池田善文	「長門銭屋における寛永通宝鑄造開始について」	『温故知新』9号	美東町文化研究会	1982年
池田善文ほか		『生産遺跡分布調査報告書—採鉱・冶金—』	山口県教育委員会	1982年
池田善文ほか		『南原寺遺跡』	美祢市教育委員会	1983年

池田善文	「末原窯跡群」	『生産遺跡分布調査報告書—窯業—』	山口県教育委員会	1983年
池田善文	「長登銅山の盛衰(一)」	『秋芳町地方文化研究』20号	秋芳町地方文化研究会	1984年
池田善文	「近世土葬墓の発掘調査」	『秋芳町地方文化研究』20号	秋芳町地方文化研究会	1984年
池田善文	「長登銅山山神吹屋遺跡発掘調査略報」	『温故知新』12号	美東町文化研究会	1985年
池田善文	「長登銅山の盛衰(二)」	『秋芳町地方文化研究』21号	秋芳町地方文化研究会	1985年
池田善文	「大田大野家と松野ハザマについて」	『温故知新』13号	美東町文化研究会	1986年
池田善文	「長登銅山跡の考古学的研究」	『温故知新』13号	美東町文化研究会	1986年
池田善文	「山口県長登銅山跡山神製錬遺跡」	『日本考古学年報』37号	日本考古学協会	1986年
池田善文	「山口県長登銅山遺跡における製錬跡の調査—平安時代の火床炉について—」	『月刊考古学ジャーナル』280号	ニューサイエンス社	1987年
池田善文	「美東町」	『山口県地名大辞典』	角川書店	1988年
池田善文	「奈良の大仏と長登銅山跡」	『山口県地方史研究』59号	山口県地方史学会	1988年
池田善文	「岩絵の具「滝ノ下緑青」」	『諸職と用具』	山口県教育委員会	1989年
池田善文	「長登銅山跡この一年」	『温故知新』16号	美東町文化研究会	1989年
池田善文	「明治・大正期の長登銅山」	『温故知新』17号	美東町文化研究会	1990年
池田善文	「銅」	『歴史考古学の問題点』	近藤出版社	1990年
池田善文	「長登銅山跡」	『山口県風土記』	旺文社	1990年
池田善文編		『長登銅山跡I』	美東町教育委員会	1990年
池田善文	「山口県長登銅山跡の調査速報」	『地域相研究』19号	地域相研究会	1990年
池田善文	「長登銅山跡の発掘調査」	『温故知新』18号	美東町文化研究会	1991年
池田善文	「山口県長登銅山跡について」	『日本歴史』第522号	吉川弘文館	1991年
池田善文・八木充	「山口・長登銅山跡」	『木簡研究』13号	木簡学会	1991年
池田善文	「山口県美祿郡美東町長登銅山跡大切製錬遺跡」	『日本考古学年報』42(1989年版)	日本考古学協会	1991年
池田善文	「長登銅山跡から見た古代の銅生産」	『山口県文化財』23号	山口県文化財愛護協会	1992年
池田善文	「山口県美祿郡美東町長登銅山跡」	『日本考古学年報』43(1990年版)	日本考古学協会	1992年
池田善文	「山口・長登銅山跡」	『木簡研究』14号	木簡学会	1992年
池田善文	「長登銅山跡」	『考古学の世界』第4巻	ぎょうせい出版	1993年
池田善文	「発掘された古代史」「ぶらり探訪」	『美祿地方歴史物語』	瀬戸内物産出版部	1993年
池田善文編		『長登銅山跡II』	美東町教育委員会	1993年
池田善文	「長門の大仏料銅遺跡」	『月刊文化財』374号	文化庁・第1法規出版(株)	1994年
池田善文	「平原第II遺跡の鉛製錬所跡」	『月刊文化財』374号	文化庁・第1法規出版	1994年
池田善文・森田孝一	「山口県美祿郡美東町平原第II遺跡」	『日本考古学年報』47号	日本考古学協会	1996年
池田善文	「古代産銅地考」	『考古学の諸相』	坂詰秀一先生還暦記念会	1996年
池田善文	「山口・長登銅山跡」	『木簡研究』18号	木簡学会	1996年
池田善文・亀田修一	「山陽」	『須恵器集成図録』(第5巻西日本編)	雄山閣	1996年
池田善文ほか		『歴史の道 赤間関街道』	山口県教育委員会	1996年
池田善文	「古代銅生産の様相と問題—長登銅山跡の調査成果から—」	『日本鉱業史研究』33号	日本鉱業史研究会	1997年
池田善文	「美東町の鉱山遺跡—その1—」	『温故知新』24号	美東町文化研究会	1997年
池田善文・八木充・森田孝一	「山口・長登銅山跡」	『木簡研究』19号	木簡学会	1997年
池田善文	「長門銭屋の鑄銭所跡と問題点」	『近世の出土銭I』	兵庫埋蔵銭調査会	1997年
池田善文ほか		『目で見える字部・小野田・美祿の100年』	郷土出版	1998年
池田善文・森田孝一		『長登銅山跡III』	美東町教育委員会	1998年

池田善文	「長門国長登銅山跡にみる生産遺構」	『季刊考古学』62号	吉川弘文館	1998年
池田善文	「古代都茂郷丸山銅山の予察」	『日本鉱業史研究』35号	日本鉱業史研究会	1998年
池田善文	「速報・美東町長登銅山跡」	『考古学ジャーナル』427号	ニューサイエンス社	1998年
池田善文	「美東町の鉱山遺跡—その2—」	『温故知新』25号	美東町文化研究会	1998年
池田善文	「長登銅山跡にみる古代の採鉱と製錬」	『月刊文化財』421号	文化庁外	1998年
池田善文	「美東町文化研究会25年の歩み」	『山口県地方史研究』79号	山口県地方史学会	1998年
池田善文・森田孝一	「山口・末原窯跡群」	『木簡研究』20号	木簡学会	1998年
池田善文	「長登銅山跡」図録解説	『発掘された日本列島展'98』	文化庁・朝日新聞社	1998年
池田善文	「古代の鉛生産について」	『資源・素材』1999—1	資源・素材学会	1999年
池田善文・八木充	「山口・長登銅山跡」	『木簡研究』21号	木簡学会	1999年
池田善文	「鉱山遺跡の踏査記録」	『山口県地方史研究』83	山口県地方史学会	2000年
池田善文	「池ノ原遺跡と周辺遺跡」	「観音銅遺跡」	『山口県史資料編：考古1』 山口県	2000年
池田善文	「大里古墳の出土遺物について」	『山口考古』20号	山口考古学会	2000年
池田善文	「長登銅山跡の発見と調査の成果」	『古代の銅生産』	美東町教育委員会	2001年
池田善文・森田孝一		『院内積石塚』	美東町教育委員会	2001年
池田善文	「『古代の銅生産シンポジウムin長登』の報告」	『日本鉱業史研究』43号	日本鉱業史研究会	2002年
池田善文	「『古代の銅生産シンポジウムin長登』の報告」	『温故知新』29号	美東町文化研究会	2002年
池田善文	「長登銅山」	『近代遺跡調査報告書—鉱山—』	文化庁文化財部記念物課	2002年
池田善文	「山口県長登銅山」	『考古学ジャーナル』487号	ニューサイエンス社	2002年
池田善文	「大里古墳」	『続：日本古墳大辞典』	東京堂	2002年
池田善文	「郷土史研究の先覚者～30周年記念によせて～」	『温故知新』30号	美東町文化研究会	2003年
池田善文	「美東町の鉱山遺跡(三)」	『温故知新』30号	美東町文化研究会	2003年
池田善文	「南原寺遺跡」「末原須恵器窯跡群」「岡の台遺跡」「平原第II遺跡」「特論：長登銅山跡」「集成図：須恵器」	『山口県史資料編：考古2』	山口県	2004年
池田善文	「三十号「郷土史研究の先覚者」等の記述誤りの訂正・補遺について」	『温故知新』31号	美東町文化研究会	2004年
池田善文	「古代の美祿」	『美東町史通史編』	美東町	2004年
池田善文	「考古：古代」「鉱山遺跡」	『美東町史資料編』	美東町	2004年
池田善文・森田孝一・井澤英二・植田晃一ほか		『銭屋遺跡』	美東町遺跡調査会	2005年
池田善文	「増補改訂版『美東町史』の編纂を終えて—集落史研究のキーワード—」	『温故知新』32号	美東町文化研究会	2005年
池田善文ほか		『図説：宇部・小野田・美祿・厚狭の歴史』	郷土出版社	2005年
池田善文	「採銅所」「鑄銭司」「長登銅山跡」	『日本古代史大辞典』	大和書房	2006年
池田善文ほか		『銅：鉱物資源と製錬技術』	美東町教育委員会	2006年
池田善文ほか		『史跡：長登銅山跡保存管理・整備基本構想』	美東町教育委員会	2007年
池田善文	「長門の産銅と採掘・製錬技術」	『和同開珎をめぐる諸問題(一)』奈良文化財研究所：松村恵司	栄原永遠男編	2007年
池田善文	「第二十一回国民文化祭シンポジウム『文化資源の活用』の記録」	『温故知新』34号	美東町文化研究会	2007年
池田善文	「古代銅製錬復元実験の報告」	『温故知新』34号	美東町文化研究会	2007年
池田善文	「長登銅山跡」	『考古学ジャーナル』562号	ニューサイエンス社	2007年
池田善文	「長登銅山の銅はなにに使われた?」	『山口県の不思議事典』	新人物往来社	2007年
池田善文	「銅」「長登銅山」	『歴史考古学大辞典』	吉川弘文館	2007年

池田善文	「古代銅製錬復元実験の経過報告」	『古代銅製錬復元実験報告書』	美東町教育委員会	2008年
池田善文	「年表で見る美東町五四年の思い出」	『温故知新』35号	美東町文化研究会	2008年
池田善文	「長登銅山文化交流館の開館」	『山口県文化財』40号	山口県文化財愛護協会	2009年
池田善文	「山崎院跡出土の銅インゴットについて」	『大山崎町文化情報2009』	大山崎町教育委員会	2009年
池田善文ほか		『長登銅山文化交流館展示図録』	美祢市教育委員会	2010年
池田善文	「古代銅製錬技術の予察」	『山口考古』30号	山口考古学会	2010年
池田善文	「検証：大田・絵堂戦の記録と逸話」	『温故知新』37号	美東町文化研究会	2010年
池田善文	「百済旅行紀—扶余・公州の古都を訪ねて—」	『温故知新』37号	美東町文化研究会	2010年
池田善文	「長登銅山跡の調査成果—古代の製錬技術について—」	『鑄造遺跡研究資料2011』	鑄造遺跡研究会	2011年
池田善文	「中・近世の長登銅山」	『長州の科学技術』4号	幕末長州科学技術史研究会	2011年
池田善文	「古代における銅生産—長登銅山跡を中心として—」	『歴史と地理』645号	吉川弘文館	2011年
池田善文	「既往調査のまとめ」「長登銅山の沿革」	『国指定史跡：長登銅山跡保存管理計画策定報告書』	美祢市教育委員会	2012年
池田善文	「検証：大田・絵堂戦の記録と逸話(続)」	『温故知新』39号	美東町文化研究会	2012年
池田善文	「長登銅山跡と長門鑄銭司【講演録】」	『研究紀要』16号	下関市立考古博物館	2012年
池田善文	「創立四〇年：研究会設立と創刊号発行の思い出」	『温故知新』40号	美東町文化研究会	2013年
池田善文	「長登銅山と古代社会」	『歴史の中の金・銀・銅—鉱山文化の所産—』	勉誠出版	2013年
吉村和久・池田善文・栗崎弘輔・岡本透外	「吉古台長登銅山大切坑石筍に記録された硫化鉄製錬」	『月刊地球』409号	海洋出版	2013年
池田善文	「考古ウォーキング 日本最古の長登銅山跡—山口県の鉱業遺跡を尋ねて—」	『考古学ジャーナル』663号	ニューサイエンス社	2014年
池田善文	「研究会50周年によせて—考古学上の二・三の雑感—」	『秋芳町地方文化研究』50号	秋芳町地方文化研究会	2014年
池田善文ほか		『保存版・ふるさと萩・長門・美祢』	郷土出版社	2014年
池田善文	「大田・絵堂戦役百五十周年記念事業の概要と新事実」	『温故知新』42号	美東町文化研究会	2015年
池田善文	「資料紹介「『大田町誌』原稿」について(一)」	『温故知新』43号	美東町文化研究会	2016年
池田善文	「古代の鉱業—長登銅山跡を中心として—」	『古代テクノポリス鑄銭司・陶』	国立大学法人山口大学・山口市教育委員会	2017年
池田善文	「資料紹介「『大田町誌』原稿」について(二)」	『温故知新』44号	美東町文化研究会	2017年
池田善文	「増訂大田・絵堂戦役—関係史料の検討から(一)—」	『温故知新』45号	美東町文化研究会	2018年
池田善文	「考古学史の散策(17)山口県の考古学史」	『考古学ジャーナル』730号	ニューサイエンス社	2019年
池田善文	「増訂大田・絵堂戦役—関係史料の検討から(二)—」	『温故知新』46号	美東町文化研究会	2019年
池田善文	「大田・絵堂戦役における二・三の問題点—児玉愛次郎談話速記録「大田戦争談」を中心として—」	『山口県地方史研究』121	山口県地方史学会	2019年
池田善文	「小郡・美祢・吉田・船木勘場の動静 増訂大田・絵堂戦役—関係史料の検討から(三)—」	『温故知新』47号	美東町文化研究会	2020年
北風嵐・池田善文・麻川昭俊・小松隆一	「山口県長登銅山の古代銅製錬のカラム中の球状銅金：特に飛鳥時代末期～平安時代の銅合金の産状と化学組成について」	『資源地質』70号	資源地質学会	2020年
北風嵐・池田善文・小松隆一	「山口県長登銅山の古代銅製錬のカラムに伴う木炭の14Cによる年代測定」	『東北アジア研究』25号	東北大学東北アジア研究センター	2021年
南健一・池田善文	「大田・絵堂戦：萩政府軍間者萩野隊士福島平吉の墓発見」	『温故知新』48号	美東町文化研究会	2021年
池田善文	「増訂大田・絵堂戦役—関係史料の検討から(四)—」	『温故知新』48号	美東町文化研究会	2021年

北風嵐・池田善文・小松隆一	「秋吉台周辺の銅製錬遺跡出土のカラムに伴う木炭の14C年代測定結果」	『山口考古』42号	山口考古学会	2022年
池田善文	「増訂大田・絵堂戦役—関係史料の検討から(五)—幕末長州藩の政権交代—いわゆる俗論派と正義派の動向—」	『温故知新』49号	美東町文化研究会	2022年
岩元亮祐・池田善文	「長登銅山跡出土の古代の銅鑄型について」	『鑄造遺跡研究資料2022』	鑄造遺跡研究会	2022年
池田善文・岩元亮祐・永井久美男	「長登銅山跡亀山遺跡の出土銭」	『出土銭貨』43号	出土銭貨研究会	2022年
池田善文	「文化研究会50年の歩み」	『温故知新』50号	美東町文化研究会	2023年
池田善文	「香春岳の銅生産」	『新・田川紀行』	田川広域観光協会	2023年
池田善文	「長登銅山跡の発見と調査成果について」	『厚東』65集	厚東郷土史研究会	2023年
池田善文・岩元亮祐・小池伸彦ほか	「長登銅山跡V」	『長登銅山跡V』	美祢市教育委員会	2024年
池田善文	「増訂大田・絵堂戦役(六)—関係史料の検討から—」	『温故知新』51号	美東町文化研究会	2024年
池田善文	「長登銅山本誓寺跡無縁墓地調査報告」	『温故知新』51号	美東町文化研究会	2024年
池田善文	「於福金山遺跡と長尾山踏査報告」	『温故知新』52号	美東町文化研究会	2025年
池田善文	「奈良の大仏特別拝観ツアー紀行」	『温故知新』52号	美東町文化研究会	2025年
③追悼文				
池田善文	「学生時代の思い出」	『遠賀川流域の考古学』	上野精志遺稿集刊行会	1985年
池田善文	「郷土研究部から考古学へ—水島君からの書簡を懐かしんで—」	『海峡の地域史—水島稔夫追悼集—』	水島稔夫追悼集刊行会	2004年
池田善文	「寺嶋文隆君を偲ぶ」	『寺嶋文隆さん追悼集』	寺嶋文隆さん追悼集刊行会	2008年
池田善文	「野村斉さんを偲ぶ」	『温故知新』35号	美東町文化研究会	2008年
池田善文	「追悼 吉永保義前会長を讃える」	『温故知新』36号	美東町文化研究会	2009年
池田善文	「安らかに山本一朗先生」	『山口考古』34号(山本一朗追悼号)	山口考古学会	2014年
池田善文	「人生の師 小野忠熙先生」	『山口考古』39号(小野忠熙追悼集)	山口考古学会	2019年
池田善文	「葉賀七三男先生との思い出」	『日本鉱業史研究』54号	日本鉱業史研究会	2021年
池田善文	「追悼 秋本貞前会長安らかに」	『温故知新』50号	美東町文化研究会	2023年
池田善文・森重武久	「追悼 安田精男さんとの思い出」	『温故知新』50号	美東町文化研究会	2023年
池田善文・中田辰吉・小田村宏	「追悼 石田隆典先生安らかに」	『温故知新』50号	美東町文化研究会	2023年

池田善文 [履歴]

※凡例=◇印:学歴。◎印:職歴、○印:職業績、●印:長登関係。△印:経歴、▲印:経歴業績。
□印:主な発表。

- △昭和23年(1948)12月22日、山口県美祢郡大田町間波(現:美祢市美東町大田)池田家の長男として出生。
- ◇昭和30年(1955)4月、大田町立大田小学校入学
- ◇昭和36年(1961)4月、美東町立美東中学校入学
- ◇昭和39年(1964)4月、山口県立美祢高等学校普通科入学
- ▲昭和41年(1966)3月、「藩政の改革:大田絵堂戦」を『郷土2号』に発表(処女作)
- ▲昭和41年(1966)8月、大里古墳発掘調査に参加(最初の発掘調査参加)
- ◇昭和42年(1967)4月、立正大学文学部史学科入学
- ▲昭和43年(1968)8月、美祢高校郷土研究部下嘉万調査参加で「環状列石」を発見。
- △昭和44年~45年(1969~1970)、全国地図製作社のアルバイトで、千葉県常総台地の露頭貝塚等から縄文土器片等採集。松戸・柏・常磐平など常磐線・京成線沿線で。
- △昭和45年(1970)12月、卒論を中断し、日野市神明上遺跡発掘調査団に参加。
- △昭和46年(1971)4月17日、千葉県四街道発掘調査の最終決定が中止となる。
- △昭和46年(1971)5月6日、父入院を知り帰郷を決定。(15日18時発「寝台特急:はやぶさ」で帰郷。) 17日より、実家18000㎡の田圃耕作・田植等、農業に従事する。
- ◎昭和46年(1971)6月24日、福岡県教育委員会文化課嘱託調査員に採用される
- 昭和46年(1971)11月13日、福岡バイパス発掘調査:久保長崎遺跡で「銅戈」の熔范を発見。
- ◇昭和47年(1972)1月、立正大学へ卒論提出、3月、立正大学文学部史学科卒業
- ◎昭和47年(1972)4月、美東町教育委員会へ就職
- △昭和47年(1972)4月、美東町青年団へ入団
- ▲昭和47年(1972)8月、間波神楽舞を大正洞でテレビ出演(以後町内神楽舞の復興に尽力)
- 昭和47年(1972)9月、長登銅山で古代の須恵器を発見し古代長登銅山跡の発見となる
- 昭和48年(1973)5月、美東町文化研究会を設立し事務局を担当
- 昭和48年(1973)5月、「古代長登(奈良登)銅山遺跡について」『温故知新』創刊号に発表
- 昭和50年(1975)10月、美東町文化財保護条例を制定。
- 昭和50年(1975)12月29日、長登銅山跡の最初の発掘調査を実施
- △昭和51年(1976)4月、美祢郡青年団連絡協議会会長に就任
- 昭和51年(1976)6月、美東町文化財審議会を発足(末原須恵器窯跡を町指定1号)
- ◇昭和51年(1976)8月、広島大学社会教育主事講習を修了(7月20日~8月26日)
- ◎ ” ” 9月、美東町教育委員会社会教育主事を拝命
- 昭和51年(1976)10月、文部省補助事業「ふるさと運動」で、長田神楽舞と民謡大田雨乞いさんさ時雨の復興を行う。さんさ時雨は昭和60年にビクターでレコード化。
- △昭和52年(1977)3月6日、美祢市伊佐町篠田道子と結婚
- ▲昭和52年(1977)10月、山口県総合青年大会を美祢郡で引受(美祢高等学校を主会場)
- ▲昭和52年(1977)11月~12月、第2回山口県青年の船企画部長として香港・マカオを巡回、参加者の船内学習・交流を企画、講師陣に古川薫、阿武孝太郎氏など。
- ・ ” ” 12月上旬帰国。
- 昭和53年(1978)7月、文部省補助事業「美東大学歴史講座」を開校(現在47回継続)
- ▲昭和53年(1978)山口県連合青年団監事として「防長青年館建設」に尽力する
- 昭和54年(1979)3月、小学生用の社会科副読本『わたしたちの町みとう』を編集刊行
- 昭和55年(1980)9月30日、美東町民センター落成式。美東町教育委員会社会教育課新設。
- △昭和56年(1981)11月6日、山口県生産遺跡分布調査調査員会議、鉱山調査開始3月まで。
- ◎昭和57年(1982)4月、美東町役場税務課へ異動。固定資産税係・町税徴収業務を兼務。
- △昭和57年(1982)5月、日本考古学協会会員となる
- 昭和57年(1982)6月、「古代長門国採銅所の予察」『山口県地方史研究』48号で発表
- △昭和58年(1983)2月、美東町職員労働組合書記長に就任
- ◎昭和58年(1983)4月、固定資産税係長拝命。
- ▲昭和60年(1985)3月、長登銅山跡山神製錬遺跡発掘調査を行い、平安時代の火床炉発見
- ▲昭和61年(1986)3月、大切製錬遺跡の清掃調査を行い、奈良時代の須恵器など確認
- △昭和62年(1987)2月、職員労働組合委員長就任

- 昭和63年(1988)3月10日、NHK奈良放送局毛利和雄記者等長登銅山跡取材
- 昭和63年(1988)3月20日、東大寺大仏殿西回廊の発掘調査で大仏の銅は長登銅山産と報道
- ▲昭和63年(1988)8月22日～31日、長登銅山跡試掘調査を担当
- ◇ 〃 11月20日、東大寺管長狭川宗玄猊下一行が長登銅山跡見学、管長講演会。
- ▲昭和63年(1988)12月、墨書土器「大家」出土を報道発表
- △平成元年(1989)2月、「ふるさと創世プロジェクト会議」委員就任(毎月2回開催)
- △平成元年(1989)3月、「むらおこし事業実行委員会」(美東町商工会)委員就任(年4～5回開催)
- ◎平成元年(1989)4月、美東町教育委員会文化係新設で文化係長へ異動
- 平成元年(1989)7月27日～、長登銅山跡発掘調査を「重要遺跡確認緊急調査」として開始
 - ◇ 8月3日、調査指導委員会(葉賀七三男、八木充、近藤喬一、島敏史、巽淳一郎。中村徹也・渡辺一雄・前田耕二・篠田忠夫・大村秀典、町教委)
 - ◇ 8月28日、2回指導委員会(委員の外、参与=文化庁:松村恵司、三宝伸銅工業:久野雄一郎、橿原考古学研究所:中井一夫、元興寺文化財研究所:内田俊秀、正倉院事務所:成瀬正和参加)
- 平成元度長登銅山跡調査成果=9世紀の製錬場跡・粘土採掘坑群・緑釉陶器等検出
- 平成2年(1990)4月、美東・徳地・小郡町長などと、奈良市長、東大寺、NHK奈良放送局を訪問し、「大仏サミット」構想を提案
- △平成2年(1990)6月、山口大学教養部非常勤講師(平成4年まで)
- 平成2年(1990)10月、美東町教育委員会『長登銅山跡I』刊行
- 平成2年(1990)11月、美東町民俗芸能保存会連絡協議会を設立する。
- 平成2年(1990)11月15日、大切ⅢC区2Tの発掘で、「天平四年四月」木簡検出。
- 平成2年(1990)12月16日～17日、奈良文化財研究所へ、木簡赤外線判読調査。八木充、館野和己、森公章、寺崎保広氏等と
- ◆平成2年度長登銅山跡調査の成果=日本最古の製錬炉検出、木簡148点出土。
- 平成3年(1991)4月～8月3日、岡の台遺跡発掘調査
- 平成3年(1991)7月、樞が葉山採鋇跡ケービング調査、須恵器発見をTV報道
- 平成3年(1991)10月18日～20日、第1回東大寺サミット開催される、シンポジウム「大仏さんをつくる」で長登銅山跡を発表(奈良県立公会堂:能舞台)
- 平成3年(1991)11月、赤間関街道中道筋の調査・整備を行い「大久保台の石畳」を発見。
(1996年「全国歴史の道百選」に選定、赤間関街道唯一の選定区域となる)
- 平成3年度長登銅山跡の調査成果=日本最古の採掘坑、平安時代の暗渠排水溝、木簡1点検出
- 平成4年(1992)4月、文化係に調査員1名増員(山口市出身森田孝一君就職)
- 平成4年(1992)9月12日、「第1回鑄造遺跡研究会」参加、長登銅山跡発表、(於:京都芸術短期大学)
- 平成5年(1993)3月、みとうおやこ劇場発足に尽力。第1回公演開催
- 平成4年度長登銅山跡調査成果=中世・近世の製錬跡、東西大溝検出
- 平成5年(1993)7月、長登銅山休憩案内所設置(ガイダンス施設として運用)
- △平成5年(1993)10月31日、山口県地方史学会40周年記念大会で発表
 - ・平成6年(1994)2月21日～3月20日、山口県立山口博物館「長登銅山展」開催、講演
- 平成5年度長登銅山跡調査成果=平安時代の鉛製錬炉跡群、作業場確認
- 平成6年(1994)7月19日～8月23日、間波遺跡緊急調査
- 平成6年(1994)7月、美東町教育委員会『長登銅山跡II』刊行
- 平成6年(1994)9月2日～10月18日、平原第II遺跡発掘調査。葉賀先生来町。
- 〃 11月10日～12月、平原遺跡B地区調査
- 平成7年(1995)3月5日～6日、考古学研究会で発表(岡山大学で)
- 平成6年度長登銅山跡調査成果=古代の大溝(東西・南北)確認、祭祀場、木簡2点。
- 平成7年(1995)11月、美東町文化協会設立準備会を発足し、1996年3月に設立。
 - ・平成8年(1996)◇3月9日、東京大学佐藤信先生来山
- 〃 3月31日資源・素材学会(早稲田大学工学部)参加、長登銅山跡発表
- 平成7年度長登銅山跡調査成果=古代の大溝合流点、近世期の作業道、木簡3点。
- ◎平成8年(1996)4月、社会教育課長補佐(兼文化係長)となる。
 - ・平成8年(1996)7月16日、長登銅山跡調査指導委員会、葉賀先生に代り植田晃一氏、
- 平成9年(1997)1月、木簡判読調査開始(八木充先生・橋本義則先生)
 - ・ 〃 1月27日、清水武人美東町長就任
- 平成8年度長登銅山跡調査成果=南北大溝①②で370点の木簡出土。官衙跡推定。

- ・平成9年(1997)4月9日～6月6日、末原窯跡前庭調査
- 「 11月1日～2日、大坂府美原町「考古学と化学分析」研究会で発表、
- 平成9年(1997)12月6日～7日、木簡学会で8年度出土木簡約200点展示、発表
 - ◇2月27日、奈良文化財研究所、箔野氏来町、木簡調査、
- 平成9年度長登銅山跡調査成果＝木簡約200点出土、奈良時代製錬炉跡群検出
- △平成10年(1998)5月24日～28日、第4回国際金属歴史会議参加、発表(松江市)
- △平成10年(1998)5月29日、植田晃一、クラドック博士、羅亭用、李氏等長登銅山跡見学
- △平成10年(1998)12月4日、父善一死亡、行年75歳、6日葬儀(於:池田家・参列者約180名)
- 平成10年度長登銅山跡調査成果＝古代の木炭窯跡、近世の工房跡を検出し、大切谷の東方に古代の顕著な遺跡が無いことを確認。
- ◎平成11年(1999)4月、美東町教育委員会:社会教育課長となる。
- 平成11年(1999)5月17～18日、文化庁へ、長登銅山跡国指定の件で県文化課吉積補佐と
- 「 11月9日、銭屋遺跡発掘調査開始
- 平成12年(2000)11月6日、文化庁へ、坂井秀弥調査官と地図指定で了解、(旧石器捏造問題有り)
- ▲平成13年(2001)1月7～8日、『山口県史』考古学部会編年会議で、須恵器の編年を担当
- 平成13年(2001)2月15日～18日、奈良文化財研究所「発掘技術者専門研修:生産遺跡調査過程」で「古代製銅所の調査と工房復元」を講義。
- 「 8月25日～27日、『長登銅山跡出土木簡図録』作成、28日印刷1日発刊。
- 平成13年(2001)8月31日～9月3日、「古代銅生産シンポジウムin長登」開催
 - 1日:古代銅製錬復元実験、3日:木簡検討会・銅生産関係遺跡ツアー等開催
- 平成14年(2002)1月7日、美東町長と「美東町史改訂版」の計画打合せ
- △平成14年(2002)5月11日、我が家:新築家屋上棟式、
- 平成14年(2002)6月8日、学校週5日制で、チャレンジ古代体験、大田苦楽部を開始。
- 平成14年(2002)7月29日～30日、文化庁へ、「長登銅山跡国史跡指定申請書」提出・審議。田口、森田、池田で文化庁係官へ説明(13時～17時)。
- 平成15年(2003)3月6日、長登銅山跡整備構想策定委員会設置(平成19年まで年2回開催)
 - 『史跡:長登銅山跡保存管理・整備基本構想』策定(平成19年4月刊行)
- 平成15年(2003)7月25日、長登銅山跡国史跡指定となる
- 平成15年(2003)10月26日、山口県地方史学会50周年記念大会で、長登銅山跡発表
- △平成16年(2004)2月16日、市町村合併協議会教育部会はじまる(教育部会長を拝命)
- 平成16年(2004)5月8日、学校週5日制で大田中央公民館主催「大田苦楽部」創設、盛況。
- 平成16年(2004)11月2日、「美東町史通史編」刊行
- ・平成17年(2005)1月17日、倉増卓雄美東町長就任
- △ 「 10月12日、山口県埋蔵文化財センター指定管理者選定委員委嘱
- 平成18年(2006)1月28日～29日、奈良文化財研究所「和同開珎をめぐる史的検討会」参加、研究発表
- △平成18年(2006)10月10日、合併協議会正副部会長会議出席(合併協議会再開へ)
- 平成18年(2006)11月4日～5日、第21回国民文化祭「シンポジウム文化資源の活用」開催
- ・ 「 12月11日、NHKハイビジョン「東大寺:よみがえる仏の大宇宙」放映
- 平成19年(2007)5月16日、長登銅山跡環境保全協議会を立ち上げる
- ▲平成19年(2007)5月30日～31日、東大寺晋山式出席、帰途、小泉氏宅を訪問し大山崎歴史民俗資料館へ、古代銅インゴット発見の端緒となる
- ▲平成19年(2007)6月22日、秋吉台エコツーリズム設立総会、以後、毎年3～4回長登銅山跡・大田絵堂戦役・美東の史跡コースを開催。
- 平成19年(2007)10月21日～23日、大田中央公民館が第60回全国優良公民館表彰を受賞、22日皇居にて天皇皇后両陛下拝謁
- 平成20年(2008)3月12日、第1回銅山まつりを開催
- ◎平成20年(2008)4月1日、新美祢市教育委員会文化財保護課長・美祢市歴史民俗資料館長・秋吉台科学博物館長・長登銅山跡資料館長を拝命
- ▲平成20年(2008)8月23日～24日、山口県須恵器編年シンポジウム(山口大)発表・討論
- 平成20年(2008)11月1日～9日、新美祢市合併記念「江嶺展」開催
- 平成20年(2008)12月12日、長登銅山文化交流館上棟式
- ◎平成21年(2009)3月31日、美祢市教育委員会退職、
- ◎平成21年(2009)4月1日、美祢市立長登銅山文化交流館長として長登銅山跡資料館勤務

- 平成21年(2009)4月24日、長登銅山文化交流館竣工式、東大寺狭川宗玄長老来賓
- ・ 〃 4月25日～5月15日、無料開館で入館者1000人を越える。
- △平成21年(2009)8月8日、山口考古学会「須恵器を見る会」「乗安・池田の還暦を祝う会」
- ・ 〃 8月29日、美祿高校活性化委員会土曜塾の開催を担当
- 平成21年(2009)9月19日～20日、秋吉台科学博物館50周年記念式典、シンポで発表。
- △平成21年(2009)11月28日、秋吉台学術懇話会を発足し事務局を担当
- ▲平成22年(2010)4月7日、大切り4号坑・花の山遊歩道敷刈作業開始
「奈良登振興会」を立ち上げ、長登銅山跡の環境整備に着手する。
- △平成22年(2010)6月11日、山口県立美祿高等学校同窓会の副会長となる
- 〃 9月13日～15日、資源・素材学会大会参加(九州大学)、研究発表、
- △平成22年(2010)11月27日、エコツアー「銅山探検」(チリ国から銅公社副総裁:A・ライブランド氏、製錬部長F・ロハス氏、シメックス社長七田氏参加)
- ▲平成23年(2011)2月、奈良登振興会が交流館周辺整備で亀山遺跡発見
- ▲平成23年(2011)3月、奈良登振興会で長登銅山案内板・説明板など設置
- △ 〃 4月、美祿市史跡長登銅山跡保存管理計画策定委員委嘱(平成23年度)
- ▲ 〃 5月7日、交流館主催「長登銅山露天掘跡探検ツアー」開催
- ◆平成23年(2011)6月～11月、奈良登振興会で本誓寺跡無縁墓地整備を行う
- △平成23年(2011)9月、大田地区区長会長として、大田ふるさと振興会設立を提案し事務局長となり、「大田・絵堂戦役跡」等の啓蒙に尽力する。
- 平成24年(2012)1月、長登銅山跡亀山遺跡中世墓発掘調査開始
- △平成25年(2013)2月19日、山口県中世城館遺跡総合調査調査員、
- △平成25年(2013)9月10日～13日、第Ⅷ回国際金属歴史会議「奈良」参加、発表
- ・平成26年(2014)9月20日、母文子葬儀、行年90歳、27日、長男「聖」ブラジルから帰国、
- ▲平成26年(2014)12月10日、大田・絵堂戦役の力士隊士の墓発見
- ▲平成27年(2015)3月8日、「大田・絵堂戦役150周年記念式典」(美東中学校体育館)
「大田・絵堂戦役特別展」『大田・絵堂戦役ガイドブック』発行
- 平成28年(2016)4月～、長登銅山資料室の整理開始、報告書作成に向けて遺物整理
- 平成29年(2017)3月4日、周防鋳銭司発掘50周年記念『古代テクノポリス鋳銭司・陶』シンポジウム参加、「古代の鋳業について」講演(山口南地域センター)
- △平成29年(2017)3月30日、周防鋳銭司跡発掘調査指導委員委嘱(現在に至る)
- 平成30年(2018)10月3日、秋篠宮殿下妃殿下の長登銅山文化交流館視察で両殿下の説明役
- ◎令和元年(2019)3月28日、美祿市立長登銅山文化交流館退職
- ◎令和元年(2019)6月、美祿市遺物整理作業員として長登銅山跡資料室勤務始まる(現行)
- △ 〃 9月、美祿市教育委員会事務事業点検評価委員委嘱(令和6年度まで)
- △ 〃 10月5日、山口考古学会総会で副会長を辞任する。
- △令和2年(2020)4月、美祿市文化財審議会委員委嘱(現在に至る)
- △令和3年(2021)4月、史跡周防鋳銭司跡保存活用計画策定委員委嘱(令和4年度まで)
- △令和3年(2021)6月、山口県地方史学会監事就任(現在に至る)
- △令和4年(2022)11月12日、美祿市ふるさと歴史講座の講師受諾(現在に至る)
- △令和5年(2023)4月27日、美祿市史編纂第I回準備委員会委員になる
- ▲ 〃 6月15日、美東町文化研究会創立50周年記念大会を開催、『温故知新50号』発行。会長(現在に至る)
- △令和5年(2023)11月24日、美東町役場の公文書整理開始
- ▲令和6年(2024)1月20日、目梨泊遺跡研究会リモート会議参加(北海道枝幸町のオホーツク文化圏の遺跡から出土した古代刀剣の銅が長登銅山産と判明し、長登銅山の発表をリモートで行う。)
- 令和6年(2024)4月、美祿市教育委員会『長登銅山跡V』著作刊行
- △ 〃 10月1日、美祿市史編纂編集委員委嘱(現在に至る)

長登銅山跡出土木簡の思い出

舘野和己

全ては東大寺境内の発掘調査から始まった。一九八八年一月から三月にかけて檀原考古学研究所が大仏殿西廻廊の西側で行った発掘調査で、奈良時代の整地層から大仏鑄造に関わる溶解炉の破片や青銅片と木炭などに加え、二二六点にのぼる木簡が出土した。銅の重量を記した付札や、光明皇后宮から熟銅を受け取ったことを示す木簡など、鑄造作業の実態を如実に示すものが多かった。そして成分分析の結果、銅は長登銅山からのものと判定された。長登の名を知ったのは、その時が初めてであり、次は長登側がどう動くかワクワクしたものである。

地元の山口県美東町(当時)は早速、一九八九年度から銅山跡の本格調査に取りかかり、一九九〇年一月には一四九点の木簡が出土した。連絡を受けた奈良国立文化財研究所からは寺崎保広氏が現地に向かい木簡を実見し、二月には池田善文氏が約九〇点の木簡とともに奈文研に來られた。当時、奈文研は大量に出土した長屋王家・二条大路木簡の処理に追われており、そのため十分な対応ができず、森公章氏らと行った赤外線TVを用いた部分的な積文作成と写真撮影にとどまったのは、申し訳ないことであった。山口に帰られた池田氏からはすぐに報道発表を行われ、その成果は全国に知られることとなった。翌年一二月の木簡学会では池田氏と八木充氏に当該木簡の報告をして頂くとともに、会場で木簡の展示も行われ、多くの会員の注目を集めた。保存処理のため暫くお預かりしてからは、調査の時間が与えられることになった。木簡には酸化銅が染みこんで黒ずみ、文字の読みにくいものが多くあり、どうすれば良いか戸惑ったが、木簡を漬けた水にEDTAを加えて暫くおくと色が薄まり、さらには保存処理を施すことで読みやすくなったことを覚えている。

一九九一年一〇月に奈良では、東大寺大仏造営関係自治体を集めた第一回の東大寺サミットが開催された。池田氏が発掘調査成果を報告されたが、私も「大仏をつくる」というタイトルで報告しており、当時のレジュメを見ると長登木簡の紹介も行っていった。

その後も二九七点が出土した九六年度調査を受け、奈文研から橋本義則氏が現地に向かい釈読作業を手伝い、九七年二月の木簡学会で再び池田・八木両氏の報告と木簡展示をお願いした。「太政大殿」(故藤原不比等家)宛ての木簡が見つかり、ここに奈良と長登の結びつきが明確になり、興奮したものである。一方、二〇〇一年九月に美東町・同教育委員会が主催して美東町で開かれた「古代の銅生産シンポジウム in 長登」では、現地見学、銅製錬の実験、木簡の展示などもして頂き、多くの見学者に驚き、また図録を手にも木簡の読みについて議論したことも忘れられない。手元の資料にはその時の書き込みの跡が多く残っている。長登木簡は多くの注目を集めた木簡群であり、当時の研究の盛り上がりは今も懐かしい。二〇一八年九月に家族旅行で山口県に行った時、約束を取らずに訪れた長登銅山文化交流館(大仏ミュージアム)でちょうど在館されていた池田氏に久しぶりに再会できたのも、嬉しい思い出である。こうした施設ができたことは、銅山跡が地元にとって大きな意味を有したことを物語っている。

木簡は銅山の経営に関する豊富な内容を物語る。それを詳しく紹介する余裕はないので、最後に表記の上で興味を引かれた例のみをあげてみる。逃亡者の人数を列記した数字を○で囲み、横に訂正した数字を書いた木簡がある。この○は見せ消しの記号であり、同じものが正倉院に残る新羅村落文書にも見える。国を超えて漢字だけでなく記号も伝来したことを示す例であり、たいそう印象的であった。また美祿郡渚鋤里を雪伎里や率吉里と書くものがあり、その多様性も面白く感じたところである。長登銅山跡出土木簡は、官営銅山の実態を示す貴重な題材として、今後も研究を深化させるべきであろう。